

静岡市埋蔵文化財調査報告

のう じま
能 島 遺 跡

— 第3次発掘調査報告書 —

2013

静岡市教育委員会

例 言

1. 本書は静岡市清水区大内新田に所在する能島遺跡の第3次発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は都市計画道路日の出町押切線の予定地にあたる。このため本遺跡の発掘調査は道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として静岡市教育委員会（生活文化局文化スポーツ部文化財課補助執行）が、静岡市建設局道路部清水道路整備課より委嘱されて実施した。発掘調査は静岡市が主体となり、現地調査及び整理作業は有限会社パル文化財研究所が業務を受託し、静岡市教育委員会の監督のもと実施した。
3. 現地調査は、平成25年4月9日から平成25年5月9日までの19日間実施した。整理作業は平成25年5月10日から平成25年9月30日まで実施した。
4. 調査体制は次の通りである。

発掘調査

監督員 大川敬夫 静岡市生活文化局文化スポーツ部文化財課 参事兼主幹
調査担当者 片平 剛 有限会社パル文化財研究所 代表取締役
日下恵一 学芸員
作業員 藤田猛史 高橋文也 須田智 松原実

整理作業

監督員 大川敬夫 (前出)
調査担当者 片平 剛 (前出)
日下恵一 (前出)
調査補助員 萩田真由美 有限会社パル文化財研究所
佐野貴紀 学芸員
作業員 藤田猛史 高橋文也 橋本成代

5. 本書の編集は、大川の指導のもと片平が担当し、1.を大川、2~5.を佐野、6.を片平が執筆した。
6. 本調査における図面、写真、出土遺物はすべて静岡市教育委員会で保管している。
7. 発掘調査及び報告書刊行にあたり、下記の方々から御協力・御指導を賜った。明記して感謝の意を表す。

(有)キーオブライフ (有)TNC 池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）小泉允子（順不同、敬称略）

凡 例

1. 遺跡の略号は「NJ」とし、遺物の注記にもこれを利用した。
2. 本調査は世界測地系、平面直角座標第VIII系を基に設定している。
3. 図版に示した方位は真北を示す。
4. 断面図などで使用した標高基準は東京湾平均海面（Tokyo Peil [T.P.]）である。
5. 土層の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色彩監修）を参照した。
6. 本文・表・図中に必要に応じて遺構記号を使用したが、これらは次のように遺構の種別を表す。
SD・・・溝 SK・・・土壤 SX・・・不明遺構 SP・・・ピット

目 次

例言

凡例

目次

1. 調査に至る経緯	1
2. 環境	
(1) 地理的環境	1
(2) 歴史的環境	2
3. 調査の概要	
(1) 調査区の設定	6
(2) 調査の経過	6
(3) 層位の観察	6
4. 遺構	
(1) 弥生時代の遺構	11
(2) 中世の遺構	13
(3) 近世の遺構	16
5. 遺物	
(1) 弥生時代の遺物	23
(2) 中世の遺物	24
(3) 近世の遺物	25
6. まとめ	27

引用・参考文献

写真図版

挿図目次

図 1 遺跡位置図	3
図 2 周辺の遺跡分布図	4
図 3 基本土層序模式図	6
図 4 調査区配置図	7
図 5 グリッド配置図および土層断面位置図	8
図 6 土層図 1	9
図 7 土層図 2	10
図 8 弥生時代の遺構全体図	11
図 9 SD01 の平断面図	12
図 10 中世の遺構全体図	13
図 11 SK09 の平断面図	14
図 12 SX02・SX03 の平断面図	15
図 13 近世の遺構全体図	16
図 14 近世土壙の平断面図	18
図 15 SX01 の平断面図	19
図 16 近世の柱穴列配置図	20
図 17 柱穴列エレベーション図	21
図 18 弥生時代の遺物	23
図 19 中世の遺物	24
図 20 近世の遺物	25
図 21 能島遺跡方形周溝墓配置図	28
図 22 第2次調査との弥生時代の遺構合成図	29
図 23 第2次調査との中世の遺構合成図	30
図 24 第2次調査との近世の遺構合成図	31

表目次

表 1 周辺遺跡一覧表	5
表 2 弥生時代の遺構一覧表	12
表 3 中世の遺構一覧表	15
表 4 近世の遺構一覧表	22
表 5 遺物観察表	26

図版目次

図版 1 1.調査区全景（南東から）2.調査区全景（西から）	
図版 2 3.調査区土層断面（西壁）4.調査区土層断面（北壁）	
図版 3 5.調査区精査（北から）6.SD01 遺物出土状況（南から）	
図版 4 7.SD01 断面（西から）8.SD01 完掘（東から）	
図版 5 9.SP05 断面（南から）10.SP05 完掘（西から）	
図版 6 11.SK08 断面（東から）12.SK08 完掘（東から）	
図版 7 13.SP12 断面（南から）14.SP12 完掘（西から）	
図版 8 15.弥生時代の遺物 16.中世の遺物 17.近世の遺物	

1. 調査に至る経緯

能島遺跡は、昭和 58 年静清バイパス建設に伴う試掘調査で発見された遺跡である。試掘調査に当たっては、能島地域が清水平野の中で微高地上に存在しているため、遺跡の有無を確認する必要が生じた。試掘調査を実施したところ、弥生土器片や灰釉陶器片が出土し、遺跡の存在が明らかになった。この結果に基づき昭和 60 年に財団法人静岡県埋蔵文化財研究所が本発掘調査 1 次調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓 27 基と平安時代から中世にかけての自然流路や溝跡、井戸跡、掘立柱建物跡、土坑などが発見された。その後、平成 9 年度には静清バイパスと交差する形で、都市計画道路日の出町押切線が計画され、平成 17 年度に確認調査を実施し、弥生時代中期の包含層が検出できた。この調査結果に基づき平成 19 年に発掘調査 2 次調査を実施し、弥生時代中期の方形周溝墓 4 基、古代の土坑 6 基、溝 1 本、ピット 78 個、近世の土坑 47 基、溝 4 本が確認された。

今回、隣接する都市計画道路日の出町押切線の予定地内で、平成 24 年 12 月に東側市道と日の出町押切線との連絡路の整備と道路改良工事が計画された。これに先立って、平成 25 年 4 月 1 日から連絡路部分について発掘調査を実施した。今回の調査は、昭和 60 年度、平成 19 年度に次いで、今回で 3 回目となるため、第 3 次調査とした。

なお、静岡市では、現体制では調査の遅延等の事態が生ずるなどの場合に限り、民間調査組織を導入することができるとして『平成 10 年 9 月付、府保伝第 75 号「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について』に基づき、平成 20 年度以降、緊急性が強く求められる民間開発に伴う発掘調査に限り、民間調査組織を導入することとしている。今回の調査原因である都市計画道路日の出町押切線は、静岡市建設局道路部清水道路整備課を工事主体とする公共工事であるため、本来は静岡市教育委員会（生活文化局文化スポーツ部文化財課）が発掘調査すべきである。しかし、現体制では他の発掘調査との兼ね合いから平成 25 年度内に調査を実施することが困難となった。しかし、本工事が生活道路として緊急性が強く求められ平成 25 年度に実施するため、やむを得ず民間調査組織を導入することとなった。

2. 環境

(1) 地理的環境（図 1）

能島遺跡は、静岡県静岡市清水区能島を中心として分布する遺跡である。能島遺跡の立地する清水平野は、北側を南アルプス前山に連なる庵原山地に、南側を名勝日本平で有名な有度丘陵に挟まれており、麻機沼付近を水源とする巴川の三角州として標高 5.0 ~ 7.0m の低地を主体として形成されている。清水平野はその範囲の多くを古折戸湾と重複しており、古折戸湾が沖積化する過程は、砂堆によるものと庵原山地や有度丘陵からの河川により扇状地・微高地を形成したものとなる。能島遺跡の立地する地点から海岸までの約 3.0 km は砂堆によるもので、その西側の扇状地・微高地による部分ではその発達が弱く、殆どが湿地帯である。これは巴川の土砂運搬の弱さを示しており、事実、巴川の勾配は 1000 分の 0.3 で、興津川の 1000 分の 9、安倍川の 1000 分の 6 と比べると非常になだらかである。能島遺跡はこのような能島地区の標高 4.3m から 5.4m 前後のところに位置している。

(2) 歴史的環境（図2・表1）

ここでは能島遺跡と中世の遺跡を中心にふれてみたい。中世における清水平野の東側、巴川流域の左岸には、藤原維清が駿河守を解任された後に、入江町に土着して形成した入江氏の一族が館を構えていた。能島遺跡の南に隣接する能島館跡には維清の次子維綱が、南東約1.5kmにある北入江館跡（カナヤ長者屋敷跡）には弟清定が館を構えており、入江から巴川流域を開発していった。鎌倉時代の武士居館は一辺が100～200mの方形单郭館が多く、周囲に濠や土塁を巡らせていた。濠内には領主の館や郎等の館、社寺などとともに百姓の家や水田もあり、百姓を支配しつつ守護もしていた。南東約1.0kmには渋川氏の渋川館跡があるが、昭和10年の調査記録によると、西南の一部が破壊されているが幅約10～12m、高さ約2.0mの土塁とその外側に濠が一辺約200mにわたって巡らされており、原形をとどめていたという。しかし現在では東北隅の一部に幅約8.0m、高さ約1.8m、全長約25.0mの土塁と幅約1.0mの濠を残すのみである。西約2.1kmには飯田館跡がある。ここでは6×3間と5×2間の掘立柱建物が見つかっている。南約1.3kmには吉香氏の吉川館跡がある。この吉香氏とは吉川氏のことで、のちに承久の乱で手柄を立てて安芸国佐東郡に地頭職を得て移転し、明治まで続く大名に成長した。しかし、東西69間、南北132間の空堀があったという記録が残るのみで、現在では痕跡は残っていない。同様に、東約850mにある高橋氏の高橋館跡、南東約3.5kmにある矢部氏の矢部館跡、南東約2.0kmにある南入江館跡、南東約2.2kmにある東入江館跡、南東約700mにある北脇館跡など、多くの館跡があるが、痕跡の残っているものは少ない。このような中に能島遺跡は存在する。

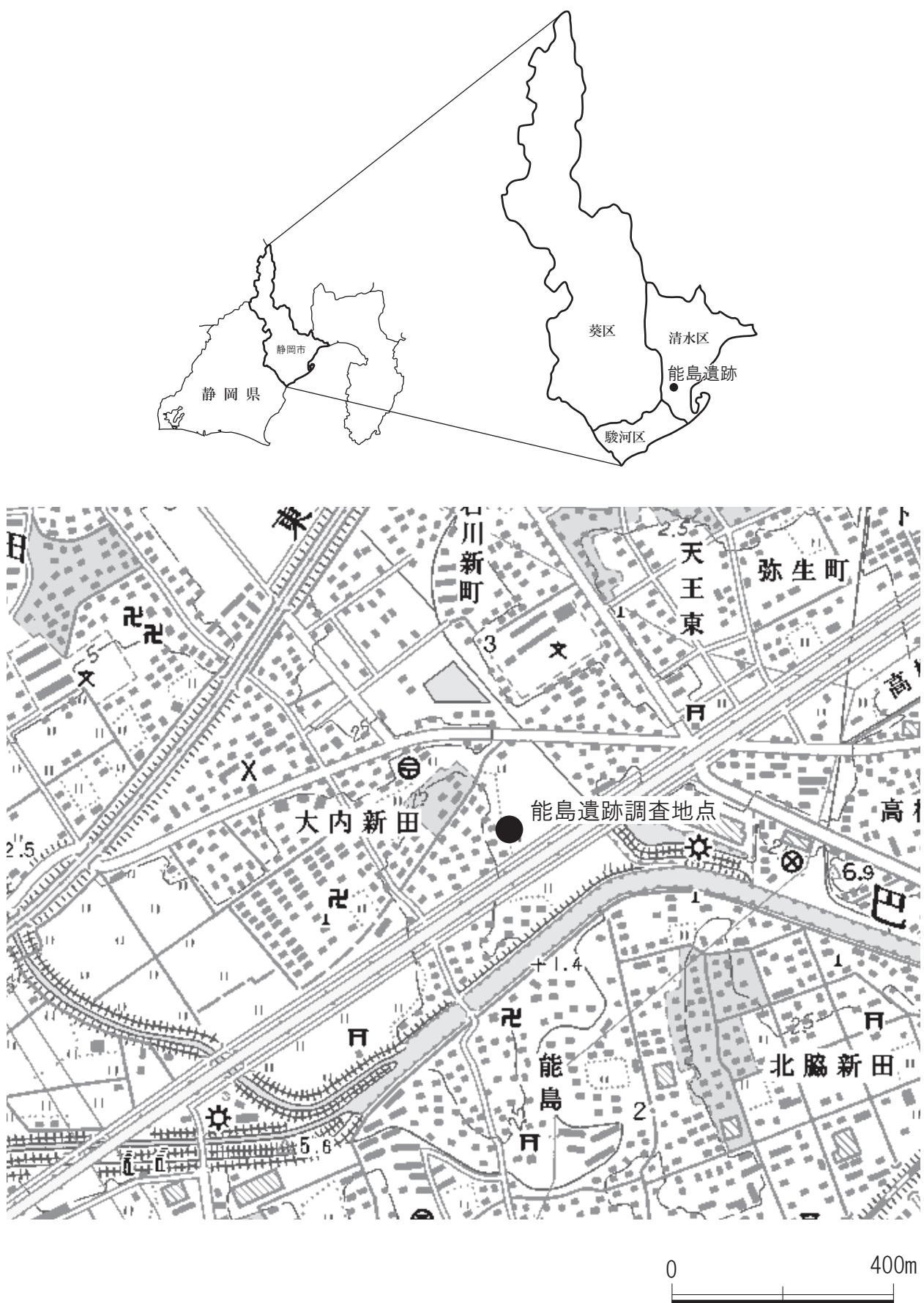


図1 遺跡位置図 (S=1/10,000 国土地理院 1/25,000 地形図を拡大)

2. 環境

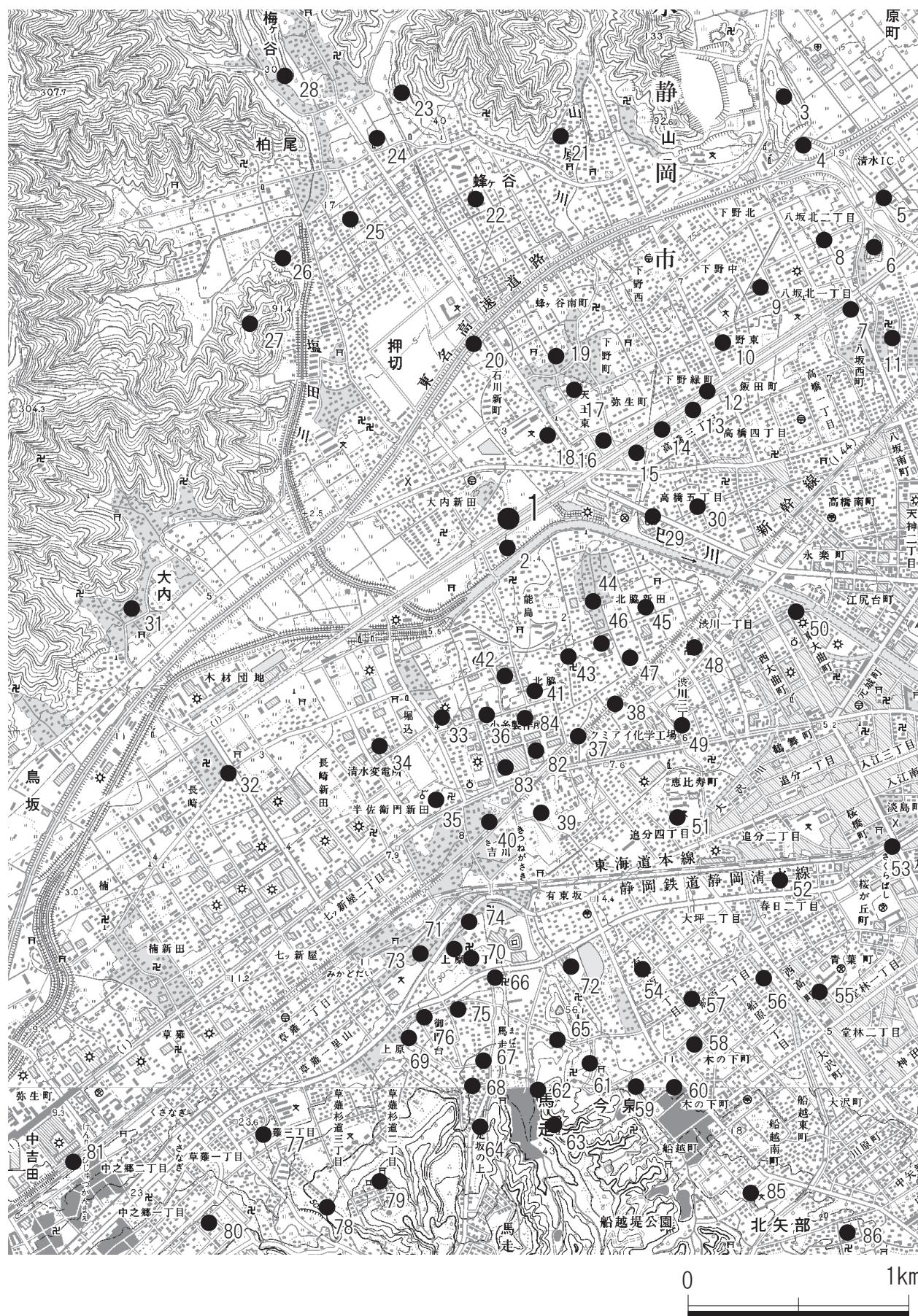


図2 周辺の遺跡分布図（国土地理院 1/25,000 地形図）

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	種別	所在地	備考
1	能島遺跡	弥生・古墳	散布地	能島	
2	能島館跡	中世	館跡	能島	
3	午王堂山II遺跡	旧石器～弥生・古墳	散布地	庵原町上午王堂	
4	午王堂山古墳群	古墳	古墳	庵原町字上午王堂	
5	船山遺跡	弥生	散布地	西久保字船山	
6	山ノ根遺跡	弥生	散布地	八坂町字山ノ根	
7	大田切I遺跡	縄文～鎌倉	散布地	高橋町字中原	
8	大田切II遺跡	弥生～古墳	散布地	高橋町字大田切	
9	大坪遺跡	弥生	散布地	下野字大坪	
10	角田遺跡	弥生	散布地	下野字角田	
11	飯田館跡	鎌倉	館跡	八坂町字五反田	
12	下野遺跡(A地区)	弥生	散布地	下野字三狐神	
13	下野遺跡(B地区)	縄文	散布地	下野字三狐神	
14	下野遺跡(C地区)	弥生～古墳	散布地	下野字三狐神	
15	飯田遺跡(久保田地点)	弥生～鎌倉	散布地	高橋町字久保田	
16	飯田遺跡(向原地点)	弥生～古墳	散布地	天王町字向原	
17	飯田遺跡(判官大島地点)	弥生～古墳	散布地	石川字判官大島	
18	向原遺跡	弥生	散布地	天王町字向原	
19	石川I遺跡	弥生	散布地	石川字寺軒	
20	石川II遺跡	弥生～古墳	集落跡	石川字一反田	
21	山原古墳	古墳	古墳	山原字来迎	
22	蜂ヶ谷古墳群	古墳	古墳	蜂ヶ谷字小山	
23	和田山遺跡	平安	散布地	蜂ヶ谷字和田山	
24	鹿島古墳	古墳	古墳	梅ヶ谷字官上	
25	イセヤ塚古墳	古墳	古墳	梅ヶ谷字中田	
26	柏尾向山遺跡	縄文	散布地	柏尾字向山	
27	柏尾向山経塚		経塚	柏尾字向山	
28	中山古墳群	古墳	古墳	梅ヶ谷字中山	
29	殿屋敷遺跡	弥生	散布地	高橋町字殿屋敷	
30	一本松遺跡	古墳	散布地	天神1丁目	
31	高橋館跡	平安～鎌倉	館跡	高橋町字殿屋敷	
32	長崎遺跡	弥生	散布地	長崎字大北宿	
33	堀込I遺跡	古墳	散布地	吉川字久根ノ内	
34	堀込II遺跡	古墳	散布地	堀込字日焼田	
35	杉田遺跡	縄文?	散布地	吉川字杉田	
36	原添I遺跡	弥生	集落跡	吉川字中堀田	
37	原添II遺跡	弥生	散布地	北脇字上巴	
38	原添III遺跡	弥生～古墳	散布地	北脇字中巴	
39	原添IV遺跡	弥生～古墳	散布地	吉川字上長面	
40	吉川館跡	鎌倉	館跡	吉川字原屋敷	
41	吉川I遺跡	弥生～鎌倉	散布地	吉川字沢渡	
42	吉川II遺跡	古墳	散布地	吉川字縁崎	
43	上ノ段遺跡	弥生	散布地	吉川字上ノ段	
44	高木遺跡	弥生	散布地	北脇新田字高木	
45	風呂の段遺跡	弥生	散布地	北脇新田字大屋敷	
46	北脇館跡	戦国	館跡	北脇新田字大屋敷	
47	北脇遺跡	古墳	散布地	北脇字宮下	
48	渋川館跡	鎌倉	館跡	渋川字曲沢	
49	大門遺跡	中世	館跡	渋川字大門	
50	大曲遺跡	縄文・古墳	散布地	渋川字久保	
51	北入江館跡(カナヤ長者屋敷跡)	平安末～室町初	館跡	追分4丁目	
52	南入江館跡	平安～室町	館跡	春日2丁目	
53	東入江館跡	平安～室町	館跡	桜橋町	
54	柿木田遺跡	古墳	散布地	有東坂字柿木田	
55	宇多利遺跡	弥生	散布地	西高町	
56	大沢川河床遺跡	古墳	散布地	船原1丁目	
57	鮑田遺跡	古墳	散布地	船原1丁目	
58	四通田遺跡	弥生～古墳	散布地	木の下町字四通田	
59	今泉I遺跡	古墳	散布地	今泉字松下	
60	今泉II遺跡	古墳	散布地	今泉字家ノ上	
61	瓦ヶ谷古窯跡	奈良	窯(瓦)	今泉字瓦ヶ谷	
62	馬走横穴	古墳	古墳	馬走字東平	
63	馬走古墳	古墳	古墳	馬走字蓮坊	
64	堂ノ山古墳	古墳	古墳	馬走字堂ノ山	
65	片瀬山古墳群	古墳	古墳	馬走北	
66	油木遺跡(上原II遺跡)	縄文	散布地	馬走字油木	
67	上原遺跡(坂上遺跡)	縄文～古墳	散布地	馬走字中原	
68	四方沢遺跡	縄文	散布地	馬走字四方沢	
69	下原遺跡	縄文	散布地	馬走字下原	
70	千手寺遺跡	弥生	散布地	上原字京塚	
71	千手寺経塚	江戸	経塚	上原字京塚	
72	山崎遺跡	縄文	散布地	有東坂字藤池	
73	荒古遺跡	弥生	散布地	上原字荒古	
74	京塚古墳	古墳	古墳	上原字京塚	
75	上原古墳群	古墳	古墳	馬走・上原	
76	禪門塚古墳	古墳	古墳	馬走字下原	
77	権現前古墳	古墳	古墳	草薙字権現堂	
78	東護古墳群	古墳	古墳	草薙字東護	
79	首塚稻荷遺跡	中世	塚	草薙字東山	
80	西の原古墳群	古墳	古墳	草薙字西の原	
81	大和製缶南遺跡	弥生	散布地	中の郷字西川	
82	どんどん塚古墳群	古墳	古墳	吉川字長面	
83	二つぼた古墳群	古墳	古墳	吉川字沢渡	
84	沢渡古墳群	古墳	古墳	吉川字沢渡	
85	天神山下遺跡	縄文～古墳	散布地	北矢部字梅ヶ坪	
86	矢部館跡	平安末～	館跡	南矢部字宅地通	

3. 調査の概要

(1) 調査区の設定

調査対象地は、道路が計画されている箇所を対象としている。調査区に、1 m × 1 m グリッドを設定した。(図 4～5)

基準点は、街区基準点を用いた。AO グリッドの座標値は、X = -107988.000m Y=-3793.000m 世界測地系である。標高値は、街区基準点から基準点測量により現地に取り付けた。各グリッドは、南北方向は南から北に A・B・C・…とし、東西方向は西から東に 1・2・3・…とした。これらの数字とアルファベットの組み合わせにより、A1・B2 というように南北の杭の名称より表記し、今回の調査面積は、27 m²である。

(2) 調査の経過

能島遺跡の調査は、平成 25 年 4 月 9 日から平成 25 年 5 月 9 日までの 19 日間をかけて実施した。

平成 25 年 4 月 9 日 調査区周囲のフェンス、ハウス、トイレの設置を行い、重機による掘削を開始した。

4 月 10 日 人力による掘削を開始し、遺構の確認を行った。

4 月 11 日 溝 1 条、土壙 3 基を確認して、基準点測量を行った。

4 月 12 日 土壙 6 基を確認し、半裁して出土遺物の写真撮影および測量を行った。

4 月 15 日 ピット 14 基を確認し、半裁して不明遺構を確認し、新たにトレーナーを設定した。

4 月 16 日 ピット 2 基を確認し、半裁して不明遺構の土層を確認し、写真撮影した。

4 月 17 日 ピットの半裁状況の写真撮影を行い、完掘した。

4 月 18 日 不明遺構内に土壙を確認し、半裁後、写真撮影した。

4 月 19 日 土壙の半裁状況の写真撮影を行い、完掘した。検出遺構の測量を行った。

4 月 22 日 溝の精査を行い、土器を確認した。不明遺構より煙管が出土した。

4 月 23 日 不明遺構を完掘する。溝の精査を行い、土器を確認した。

4 月 24 日 不明遺構の壁面に旧河川の流れ込みを確認し、トレーナーを設定した。溝を完掘した。

4 月 25 日 調査区全体写真を撮影した。調査区壁の写真測量を行った。

4 月 26 日 フェンス、トイレの撤去を行った。

4 月 27 日 ハウスの撤去を行った。

5 月 1 日 旧河川の下層の掘削を行った。

5 月 2 日 地山検出面まで掘削を行った。

5 月 7 日 地山検出面の掘削を完了した。

5 月 9 日 重機による埋戻しを完了した。

(3) 層位の観察 (図 3・6～7)

能島遺跡の基本的な土層は 2 層から成る。第 I 層は表土層 (1) で厚さ約 20～40cm を測る。第 II 層はにぶい黄色土で礫を含む層 (9.12.13.14.15.16) で、厚さ約 10～60cm を測る。調査区の北西部に多くみられ、遺構のベースとなるものである。調査区の中で第 2 層の見られない部分では、遺構は地山層 (2.3.4) をベースとしている。

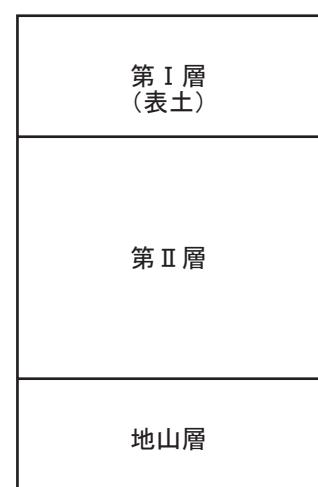


図 3 基本土層序模式図



第1次調査地点及び、第2次調査地点の図は
1989 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所『能島遺跡（本文編）』及び
2010 静岡市教育委員会『能島遺跡発掘調査報告書』より作成した

図4 調査区配置図 (S=1/1,000)

3. 調査の概要

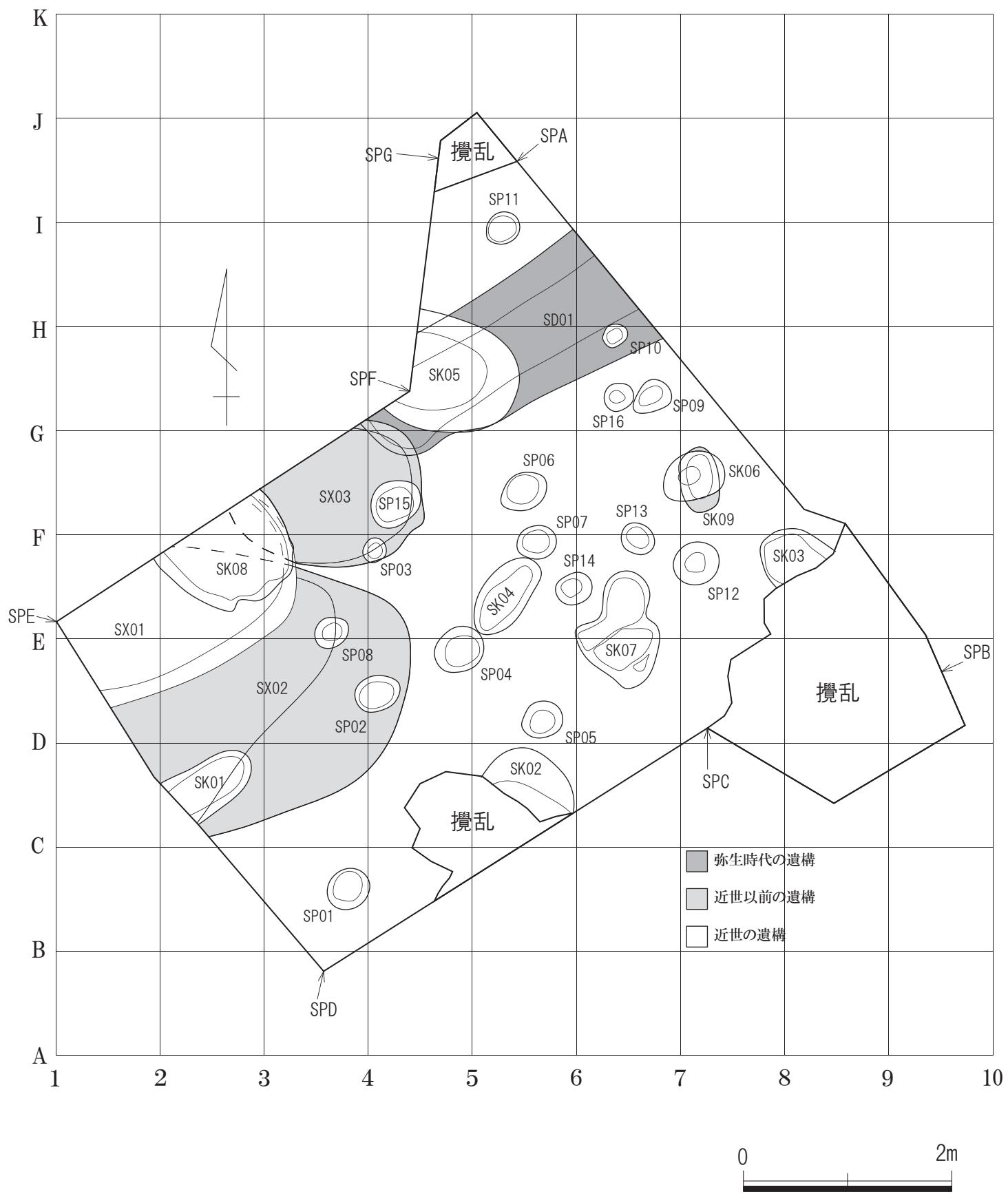


図5 グリッド配置図および土層断面位置図 (S=1/50)

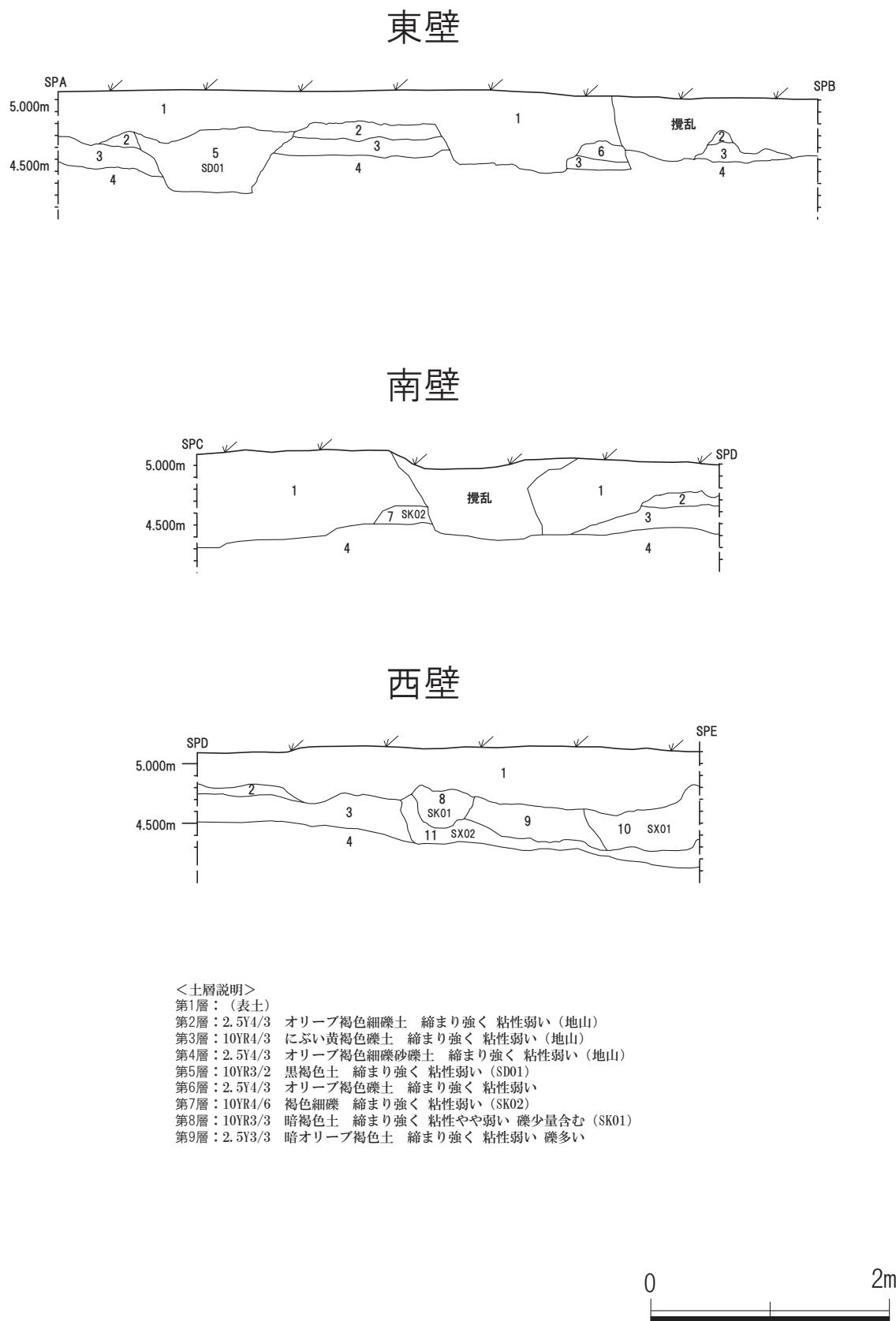
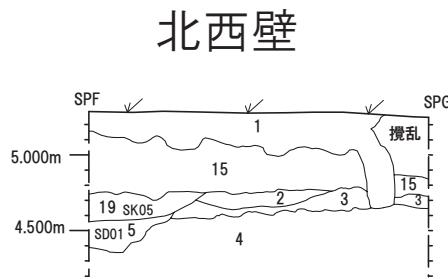
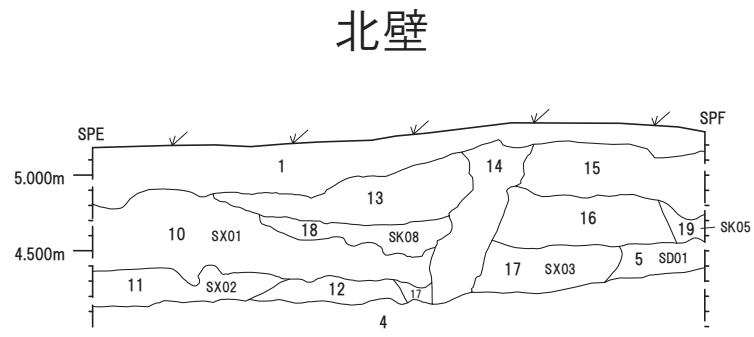


図6 土層図1 (S=1/50)

3. 調査の概要



<土層説明>

- 第10層: 5Y5/2 灰オリーブ粘土 締まり強く 粘性弱い 磨少量含む (SX01)
- 第11層: 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土 締まり強く 粘性やや強い (SX02)
- 第12層: 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土 締まり強く 粘性やや強い
- 第13層: 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土 締まり強く 粘性弱い 磨を含む
- 第14層: 5Y5/2 灰オリーブ粘土 締まり強く 粘性弱い 磨少量含む
- 第15層: 2.5Y6/3 にぶい黄色土 締まり強く 粘性弱い ガラを含む
- 第16層: 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 締まり強く 粘性弱い 磨を含む
- 第17層: 10YR4/4 褐色粘土 締まり強く 粘性弱い (SX03)
- 第18層: 10YR4/3 にぶい黄褐色礫土 締まり強く 粘性弱い 土器片を含む (SK08)
- 第19層: 10YR4/4 褐色土 締まり強く 粘性やや弱い 磨を多く含む (SK05)



図 7 土層図 2 (S=1/50)

4. 遺構

おもな遺構としては、弥生時代の溝、中世の土壙、近世の土壙、ピットが確認できた。

(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としては溝1本が確認できた。(図8・表2)



1) 溝状遺構 (図9)

SD01 は F4・G4・G5・G6・H4・H5・H6 グリッドにあり、東側と北西隅が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明であるが、先端は方形にまとまると思われる。残存長は 2.76m、幅 1.09m、深さ 0.44m を測り、断面は U 字型である。覆土は黒褐色土である。過去の能島遺跡の調査で発見された方形周溝墓と比較すると、第 1 次調査、第 2 次調査では、N-0°-W ~ N-15°-W をとる周溝の主軸方位が、SD01 では N-30°-W となっているが、形状・覆土から方形周溝墓の周溝の可能性が考えられる。遺物は弥生土器の細片が出土している。

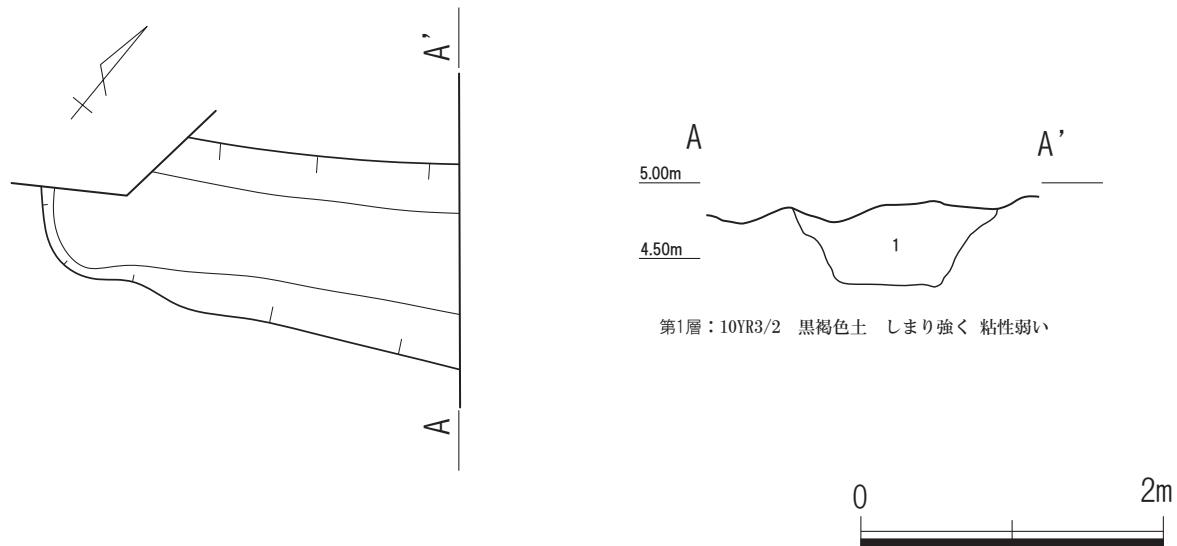


図9 SD01 の平断面図 (S=1/50)

表2 弥生時代の遺構一覧表

番号	位置	最大長	巾	深さ	主軸方向	断面形	覆土	備考
SD01	F4・G4・ G5・G6・ H4・H5・ H6	(2.76)	1.09	0.44	N-30°-W	U字型	黒褐色土	東・西は攪乱と調査区範囲で切られおり不明

(2) 中世の遺構

中世の遺構としては土壙1基、不明遺構2基が確認できた。(図10・表3)

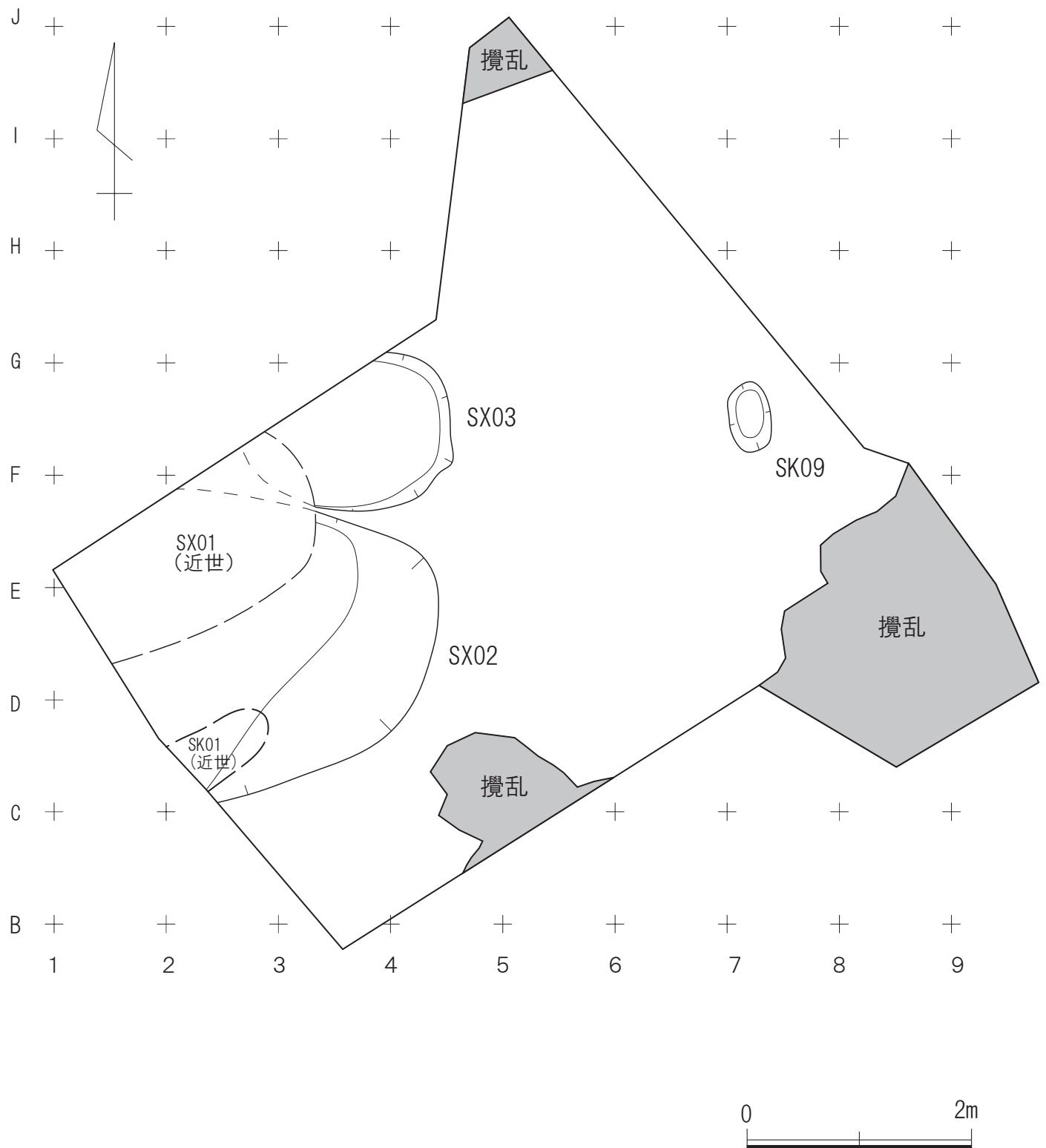


図10 中世の遺構全体図 (S=1/50)

1) 土壙（図 11）

SK09 は F7 グリッドにあり、全長 0.60m、幅 0.36m、深さ 0.16m を測る。平面は橢円形、断面は U 字型である。覆土は暗褐色粘土で、遺物は出土していない。

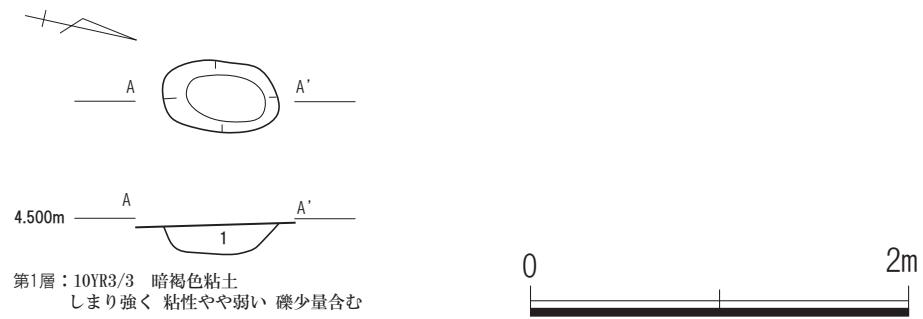


図 11 SK09 の平断面図 (S=1/40)

2) 不明遺構（図 12）

SX02 は C2・C3・D2・D3・D4・E3・E4 グリッドにあり、北西を SX01 に切断され、南西が調査範囲外のため不明である。残存長 3.00m、幅 1.62m、深さ 0.67m を測り、断面は U 字型である。覆土はオリーブ褐色粘土で、遺物は出土していない。

SX03 は E3・E4・F3・F4 グリッドにあり、南西を SX01 に切断され、北西が調査範囲外のため不明である。残存長 1.76m、幅 1.42m、深さ 0.35m を測り、断面は U 字型である。覆土は褐色粘土で、遺物は出土していない。

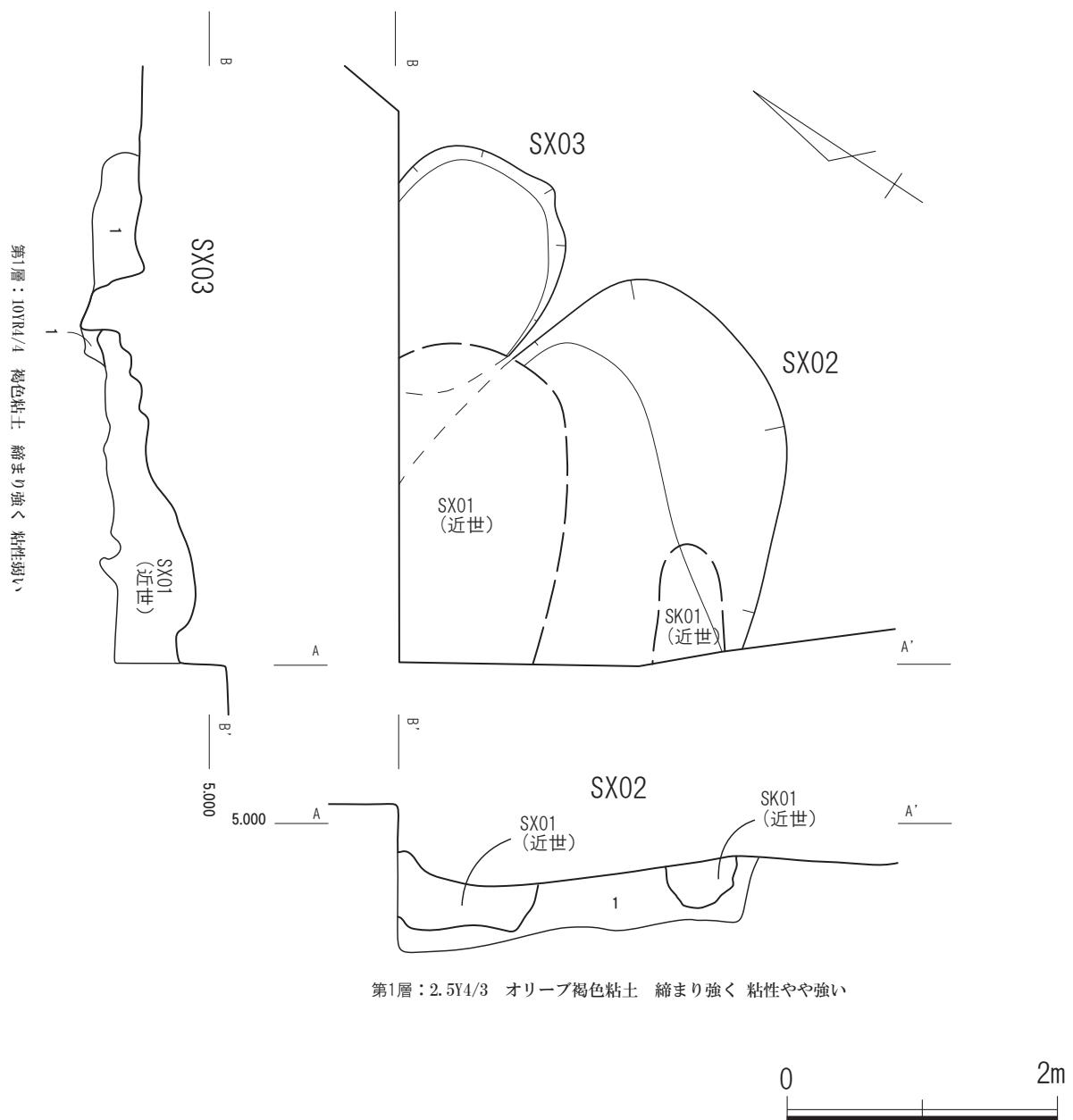


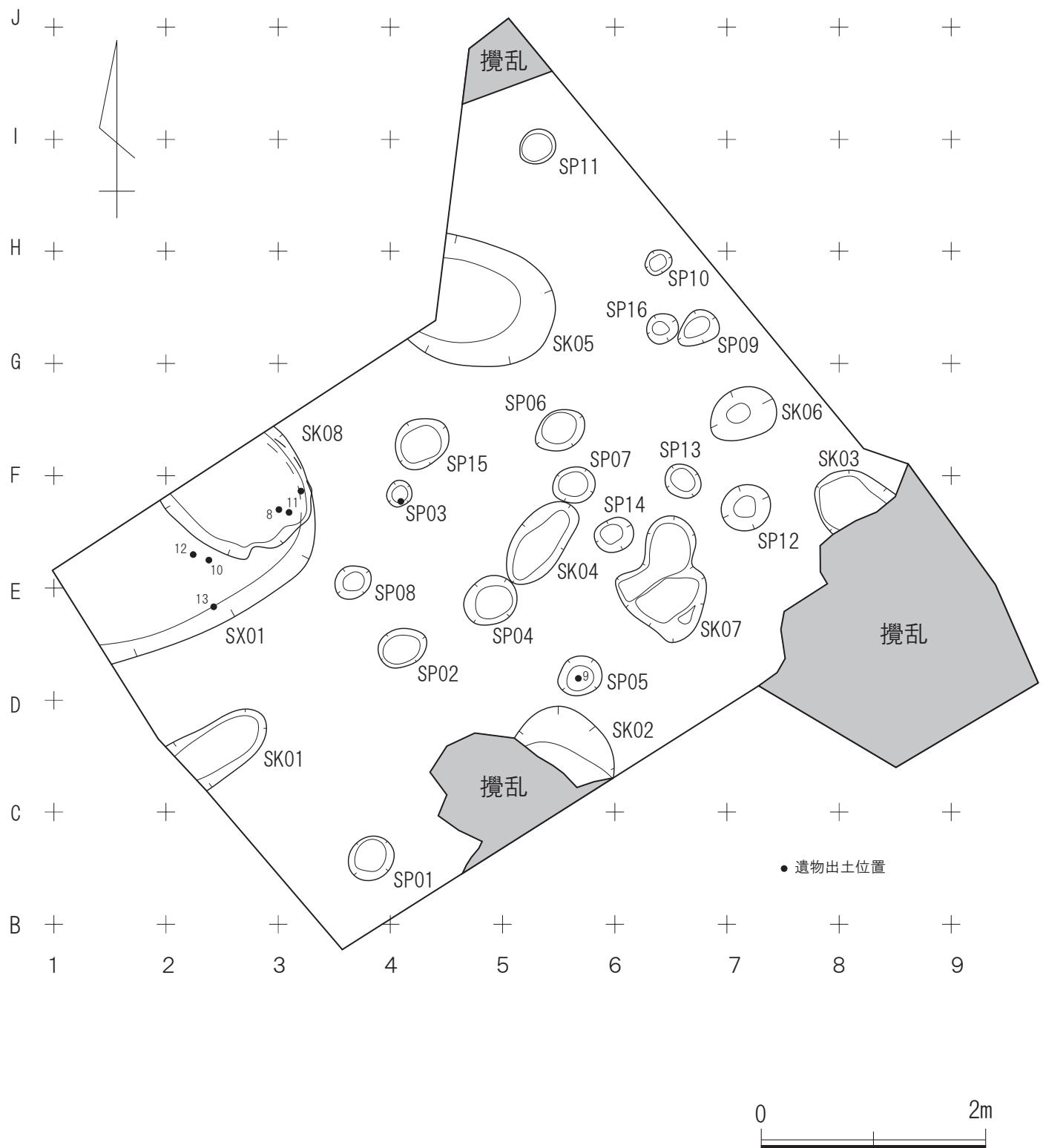
図 12 SX02・SX03 の平断面図 (S=1/50)

表3 中世の遺構一覧表

番号	位置	最大長	巾	深さ	平面形	断面形	覆土	備考
SK09	F7	0.60	0.36	0.16	楕円形	U字型	暗褐色粘土	
SX02	C2・C3・ D2・ D3・ D4・E3・ E4	(3.00)	(1.62)	0.67	円形	U字型	オリーブ褐色粘土	北は SX01 に切られており、西は調査範囲外のため不明
SX03	E3・E4・ F3・F4	(1.76)	(1.42)	0.35	円形	U字型	褐色粘土	西は SX01 に切られており、北は調査範囲外のため不明

(3) 近世の遺構

近世の遺構としては土壙 8 基、ピット 16 基、不明遺構 1 基、柱穴列 3 列が確認できた。(図 13・表4)



1) 土壙（図 14）

SK01 は C2 グリッドにあり、西が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長 0.83m、幅 0.45m、深さ 0.23m を測り、平面は橜円形、断面はコ字型である。覆土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

SK02 は C5 グリッドにあり、南を攪乱に切断されているため全体の規模・形状は不明である。残存長 0.90m、幅 0.52m、深さ 0.23m を測り、平面は円形、断面は U 字型である。覆土は褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SK03 は E7・E8 グリッドにあり、南東を攪乱に切断されているため全体の規模・形状は不明である。残存長 0.47m、幅 0.66m、深さ 0.15m を測り、平面は円形、断面は U 字型である。覆土は黄褐色礫土で、遺物は出土していない。

SK04 は E5 グリッドにあり、全長 0.85m、幅 0.45m、深さ 0.19m を測る。平面は橜円形、断面はコ字型である。覆土は暗褐色粘土で、遺物は出土していない。

SK05 は G4・G5 グリッドにあり、西が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長 1.06m、幅 1.06m、深さ 0.19m を測り、平面は円形、断面は U 字型である。覆土は褐色土で、遺物は出土していない。

SK06 は F6・F7 グリッドにあり、全長 0.62m、幅 0.44m、深さ 0.09m を測る。平面は橜円形、断面は U 字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SK07 は D6・E6 グリッドにあり、全長 1.13m、幅 0.81m、深さ 0.21m を測る。平面は不定形、断面は U 字型である。北にテラス状の段差がある。覆土は暗褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SK08 は E2・E3・F2・F3 グリッドにあり、北が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長 1.27m、幅 0.91m、深さ 0.29m を測り、平面は円形、断面は U 字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は磁器が 1 点出土している。

2) ピット

SP01 は B3・B4 グリッドにあり、全長 0.44m、幅 0.39m、深さ 0.26m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色礫土で、遺物は出土していない。

SP02 は D3・D4 グリッドにあり、全長 0.45m、幅 0.34m、深さ 0.21m を測る。平面は橜円形、断面はコ字型である。覆土は褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP03 は E4 グリッドにあり、全長 0.23m、幅 0.21m、深さ 0.10m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土は暗褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP04 は D4・D5・E4・E5 グリッドにあり、全長 0.48m、幅 0.42m、深さ 0.24m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土である。遺物は出土していない。

SP05 は D5 グリッドにあり、全長 0.39m、幅 0.32m、深さ 0.26m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は輸入陶磁が 1 点出土している。遺物の年代は近世以前であるが、遺構覆土の状況から近世の遺構とした。

SP06 は F5 グリッドにあり、全長 0.49m、幅 0.36m、深さ 0.20m を測る。平面は橜円形、断面はコ字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP07 は E5・F5 グリッドにあり、全長 0.37m、幅 0.32m、深さ 0.20m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP08 は D3・E3 グリッドにあり、全長 0.33m、幅 0.28m、深さ 0.17m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

4. 遺構

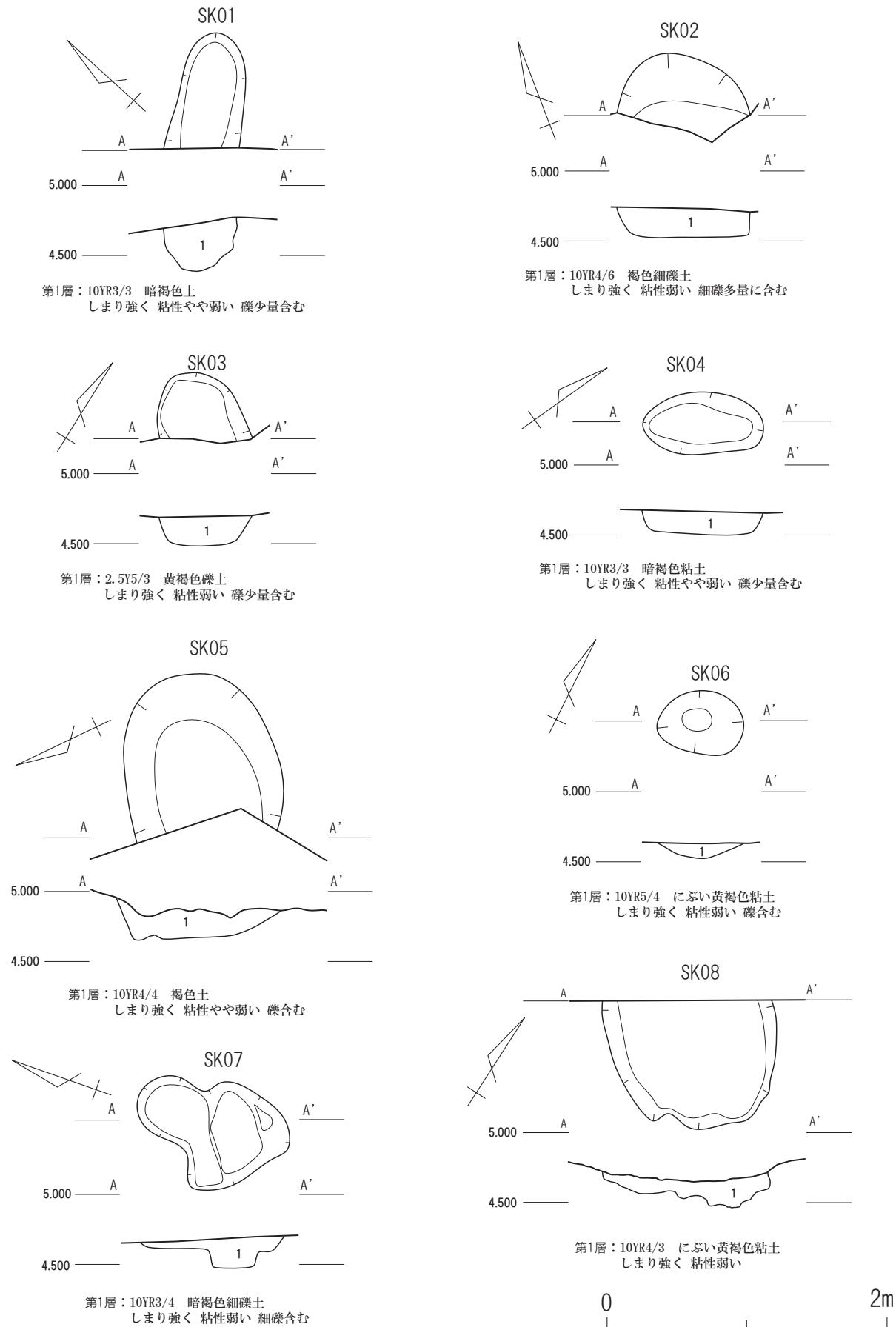


図 14 近世土壌の平断面図 (S=1/40)

SP09 は G6 グリッドにあり、全長 0.38m、幅 0.29m、深さ 0.21m を測る。平面は橢円形、断面は U 字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP10 は G6 グリッドにあり、全長 0.24m、幅 0.20m、深さ 0.14m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

SP11 は H5・I5 グリッドにあり、全長 0.33m、幅 0.29m、深さ 0.19m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP12 は E6・E7 グリッドにあり、全長 0.45m、幅 0.41m、深さ 0.13m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土はにぶい黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP13 は E6・E7 グリッドにあり、全長 0.34m、幅 0.30m、深さ 0.14m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土はにぶい黄褐色礫土で、遺物は出土していない。

SP14 は E5・E6 グリッドにあり、全長 0.34m、幅 0.28m、深さ 0.13m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土はオリーブ褐色細礫土で、遺物は出土していない。

SP15 は F4 グリッドにあり、全長 0.50m、幅 0.40m、深さ 0.21m を測る。平面は円形、断面はコ字型である。覆土は黄褐色粘土で、遺物は出土していない。

SP16 は G6 グリッドにあり、全長 0.28m、幅 0.26m、深さ 0.16m を測る。平面は円形、断面は U 字型である。覆土は褐色細礫土で、遺物は出土していない。

3) 不明遺構 (図 15)

SX01 は D1・D2・E1・E2・E3・F2・F3 グリッドにあり、北・西が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明である。残存長 2.64m、幅 1.22m、深さ 0.58m を測り、平面は長方形、断面はコ字型である。覆土は灰オリーブ色粘土で、遺物は須恵器 1 点、陶器 2 点、金属器 1 点が出土している。その中に近世以前の遺物も含まれるが、近世の遺物も出土しているので近世の遺構とした。

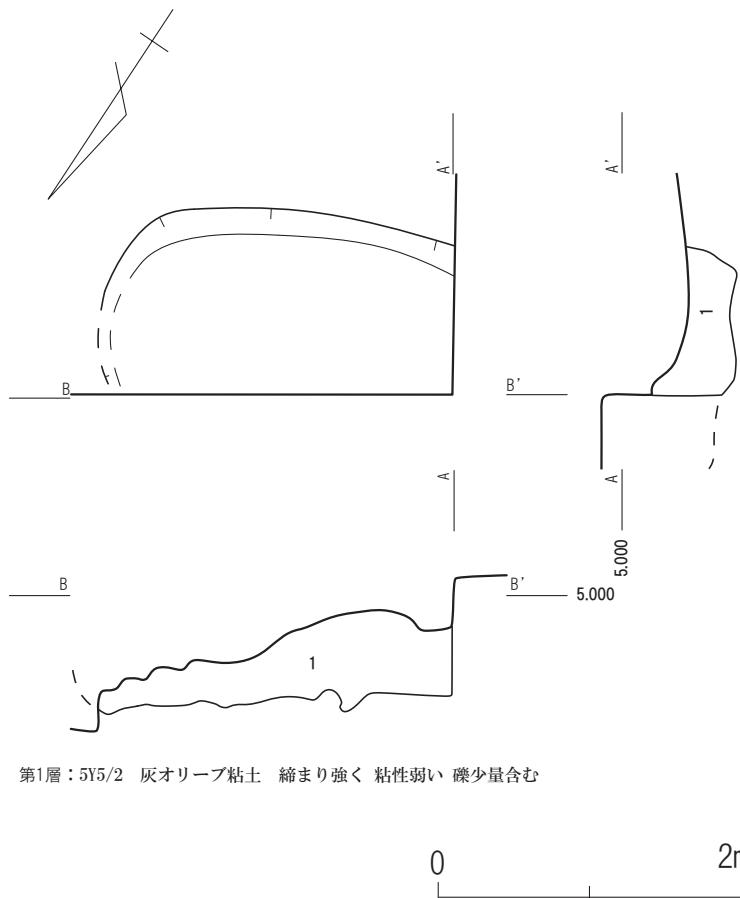


図 15 SX01 の平断面図 (S=1/50)

4) 柱穴列 (図 16・図 17)

柱穴列 01 は北から順に SP15、SP02、SP01 で構成される柱穴列である。主軸方向は N-9°-E を示している。柱間距離は 1.8m である。

柱穴列 02 は西から順に SP08、SK04、SP12 で構成される柱穴列である。主軸方向は N-80°-E を示している。柱間距離は 1.8m である。

柱穴列 03 は北から順に SP09、SP12 で構成される柱穴列である。主軸方向は N-10°-W を示している。柱間距離は 1.8m である。柱穴列 02 とは直交方向を示しているが、合わせて建物を構成するかは不明である。

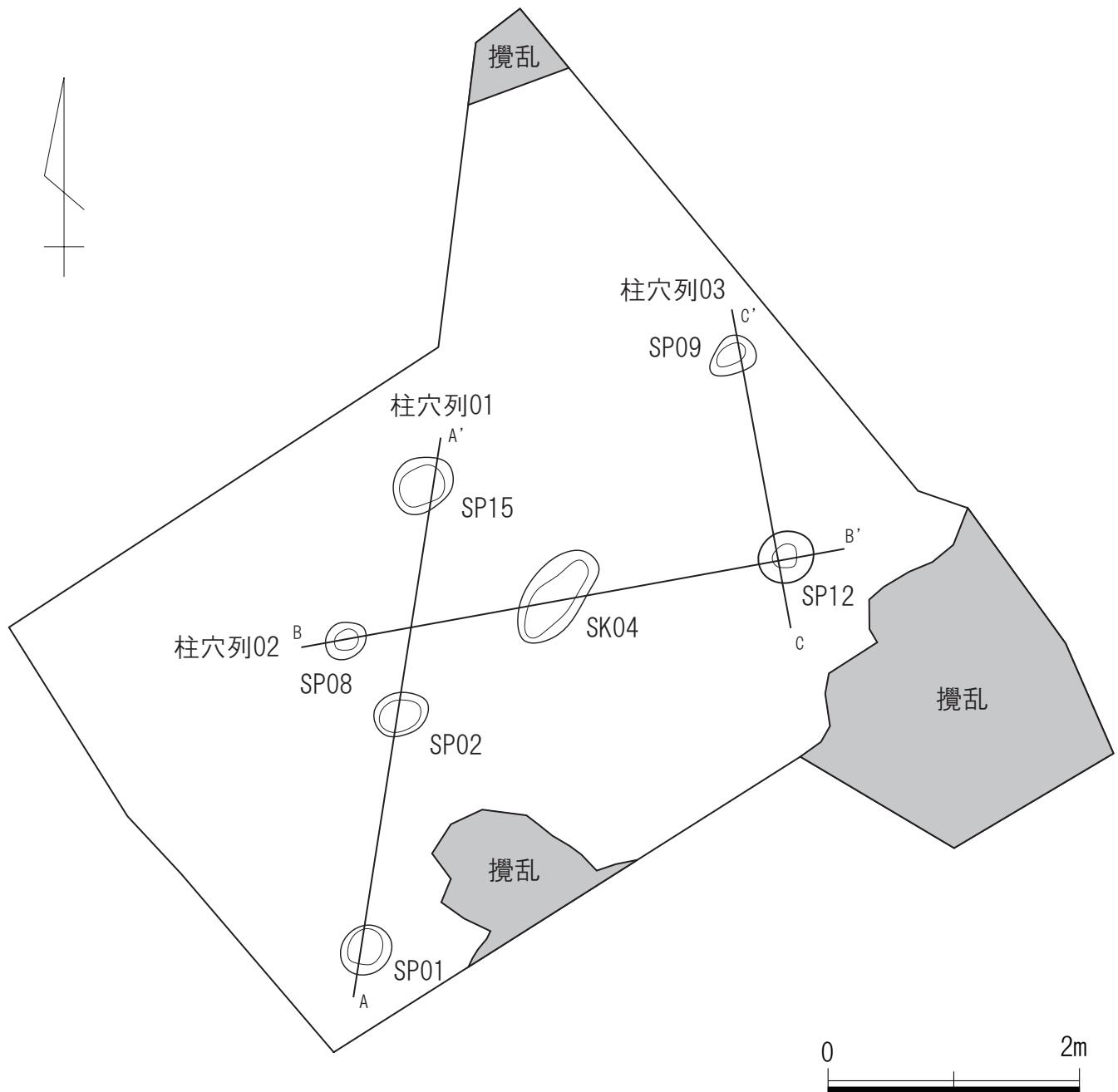


図 16 近世の柱穴列配置図 (S=1/50)

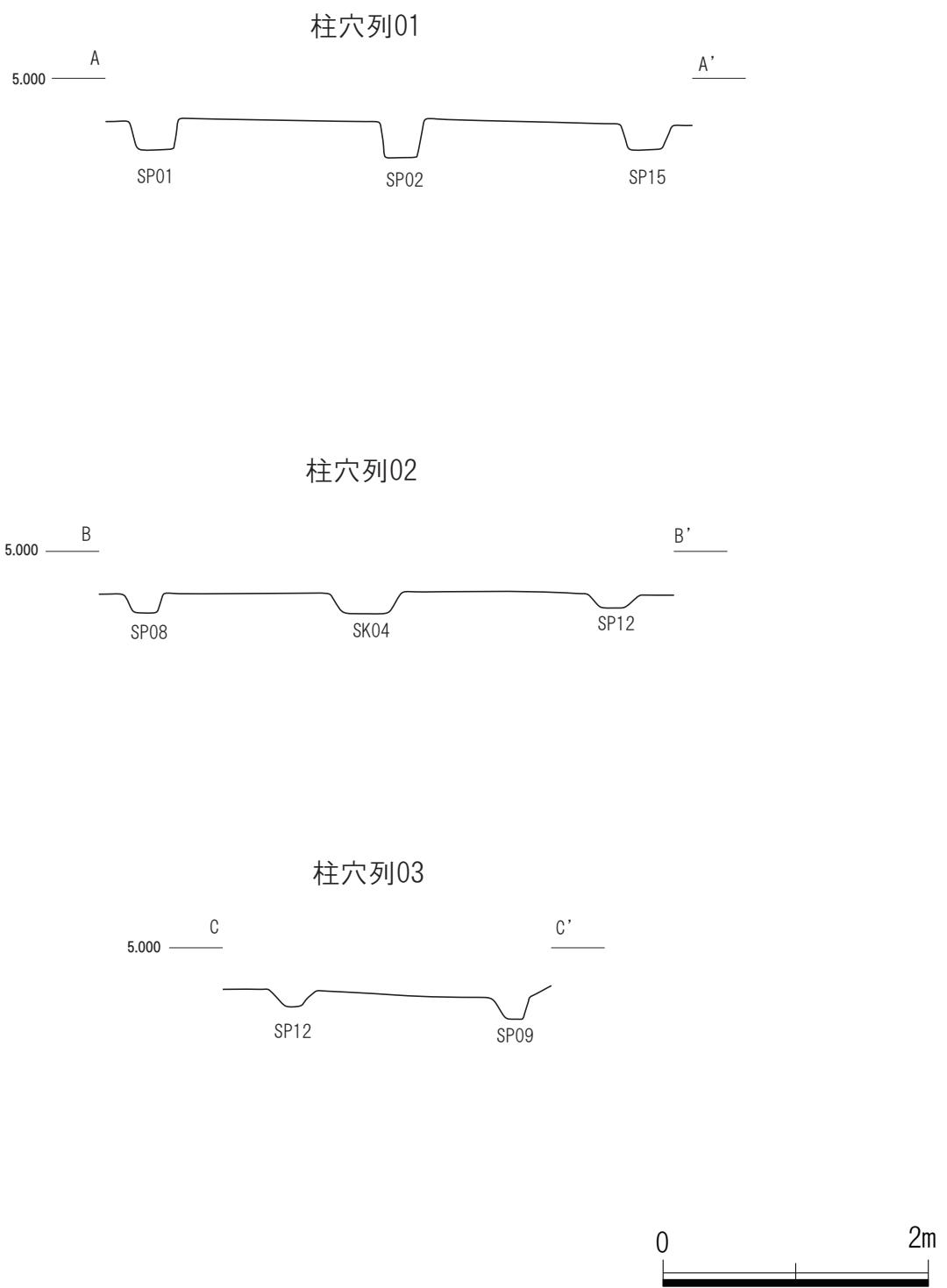


図 17 柱穴列エレベーション図 (S=1/50)

表4 近世の遺構一覧表

番号	位置	最大長	巾	深さ	平面形	断面形	覆土	備考
SK01	C2	(0.83)	0.45	0.23	楕円形	コ字型	暗褐色土	西は調査範囲外のため不明 SX02 を切断
SK02	C5	(0.90)	(0.52)	0.23	円形	U字型	褐色細礫土	南は攪乱に切られており不明
SK03	E7・E8	(0.47)	(0.66)	0.15	円形	U字型	黄褐色礫土	南は攪乱に切られており不明
SK04	E5	0.85	0.45	0.19	楕円形	コ字型	暗褐色粘土	
SK05	G4・G5	(1.06)	1.06	0.19	円形	U字型	褐色土	西は調査範囲外のため不明
SK06	F6・F7	0.62	0.44	0.09	楕円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	
SK07	D6・E6	1.13	0.81	0.21	不定形	U字型	暗褐色細礫土	
SK08	E2・E3・ F2・F3	(1.27)	(0.91)	0.29	円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	北は調査範囲外のため不明 SX01 を切断
SP01	B3・B4	0.44	0.39	0.26	円形	コ字型	にぶい黄褐色礫土	
SP02	D3・D4	0.45	0.34	0.21	円形	コ字型	褐色粘土	
SP03	E4	0.23	0.21	0.10	円形	U字型	暗褐色粘土	
SP04	D4・ D5・E4・ E5	0.48	0.42	0.24	円形	コ字型	にぶい黄褐色粘土	
SP05	D5	0.39	0.32	0.26	円形	コ字型	にぶい黄褐色粘土	
SP06	F5	0.49	0.36	0.20	円形	コ字型	オリーブ褐色細礫土	
SP07	E5・F5	0.37	0.32	0.20	円形	コ字型	にぶい黄褐色粘土	
SP08	D3・E3	0.33	0.28	0.17	円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	
SP09	G6	0.38	0.29	0.21	楕円形	U字型	オリーブ褐色細礫土	
SP10	G6	0.24	0.20	0.14	円形	コ字型	黒褐色土	SD01 を切断
SP11	H5・I5	0.33	0.29	0.19	円形	コ字型	オリーブ褐色細礫土	
SP12	E6・E7	0.45	0.41	0.13	円形	U字型	にぶい黄褐色粘土	
SP13	E6・F6	0.34	0.30	0.14	円形	コ字型	にぶい黄褐色礫土	
SP14	E5・E6	0.34	0.28	0.13	円形	U字型	オリーブ褐色細礫土	
SP15	F4	0.50	0.40	0.21	円形	コ字型	黄褐色粘土	
SP16	G6	0.28	0.26	0.16	円形	U字型	褐色細礫土	
SX01	D1・ D2・E1・ E2・E3・ F2・F3	(2.64)	(1.22)	0.58	長方形	コ字型	灰オリーブ色粘土	北、西は調査範囲外のため不明、 SX02・SX03 を切断

5. 遺物

(1) 弥生時代の遺物

出土した弥生土器のうち 7 点を図示した。(図 18・表 5) すべて、SD-01 から出土したものである。

全体の磨耗が激しく、口縁部及び底部の残存がなく殆んどが胴部の破片と見られ、器形・形態等詳細は不明である。

1・3・4・5 の外面には、櫛描紋と思われる細かな刷毛目が観察できる。2・6・7 は、全体に荒い単位の縦の刷毛目が観察できる。

胎土は、やや粗く、ほとんどが石粒の混合材を含んでいる。

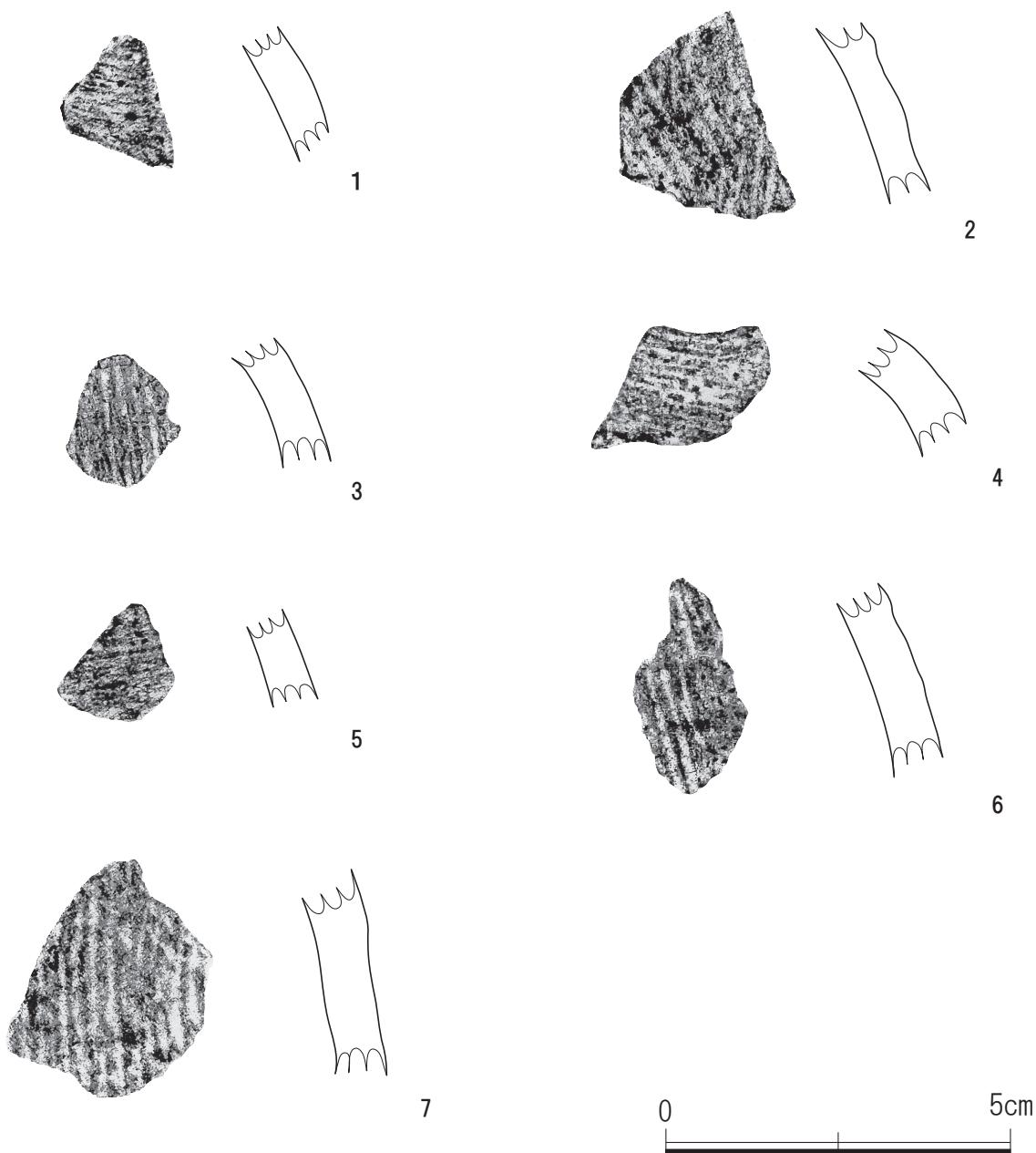


図 18 弥生時代の遺物 (S=1/1)

(2) 中世の遺物

出土した土器のうち 4 点を図示した。(図 19・表 5)

9 は SP05 より出土した輸入陶磁の白磁皿と思われる。底部まで施釉されていること、胎土に黒い粒子が多く混ざっていることから輸入陶磁と思われる。13 世紀後半～14 世紀前半頃のものと思われる。なお、SP05 は遺物の年代は近世以前であるが、覆土の状況から近世の遺構とした。

10 は SX01 より出土した輸入陶磁の青磁器と思われる。器種は不明である。

13 は SX01 より出土した須恵器の壺瓶類と思われる。内外面ともに無釉で、内面はナデ、外面はケズリ調整されている。なお、SX01 は出土遺物の一部の年代は近世以前であるが、近世の出土遺物も存在することから近世の遺構とした。

14 は遺構外より出土した須恵器で器種は不明と思われる。外面に灰釉がかかっている。付帯の接着部分のみ残存している。

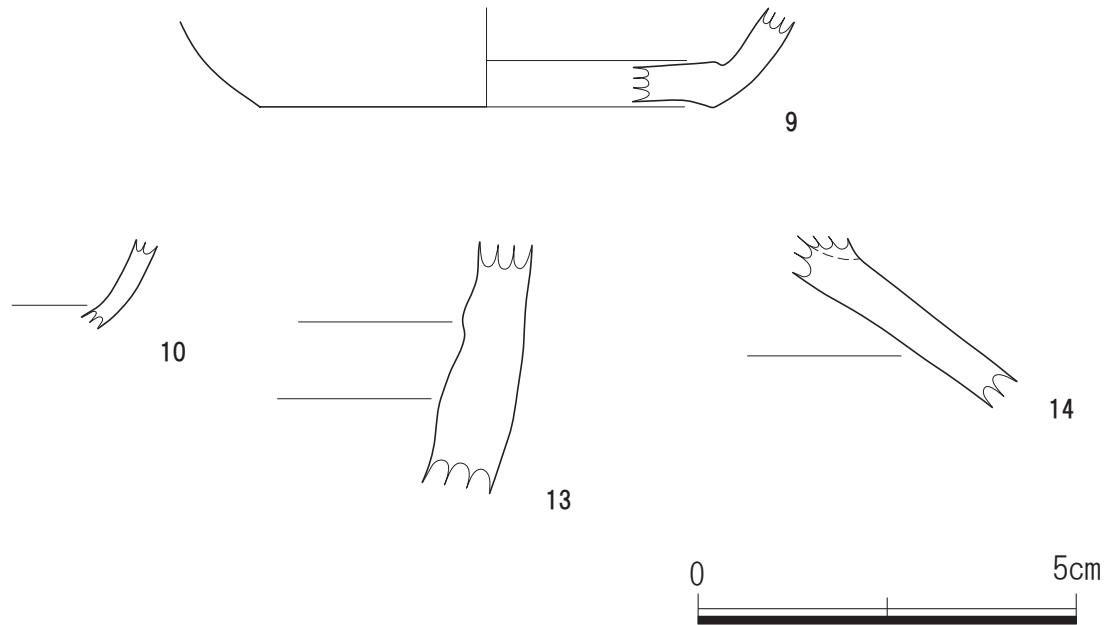


図 19 中世の遺物 (S=1/1)

(3) 近世の遺物

出土した土器のうち4点を図示した。(図20・表5)

8はSK08より出土した肥前産磁器の染付碗と思われる。外面に二重網目文の一部がみられる。近世後半に属すると思われる。

11はSX01より出土した煙管の雁首と思われる。首部が直線的で、火皿が直角に近い角度で取り付けられていることからVI段階に属すると思われる。

12はSX01より出土した器種不明の陶器と思われる。外面に鉄釉がかかっている。近世に属すると思われる。

15は表採された陶器の高台部分と思われる。皿類か瓶類の貼付高台が接着不十分だったために剥がれたものと思われる。近世に属すると思われる。

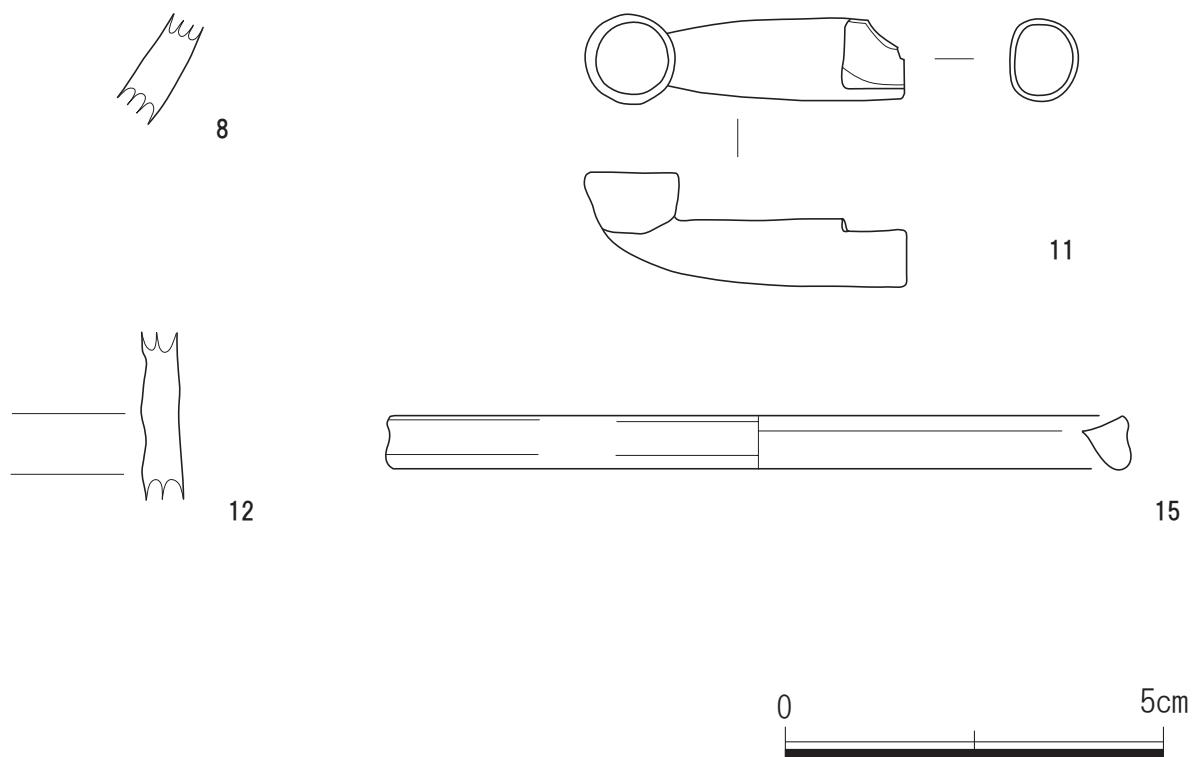


図20 近世の遺物 (S=1/1)

5. 遺物

表5 遺物観察表

No.	遺構	種別・器種	法量 (cm) 口径・器高・底径	形 態	製作技法	胎土・焼成・色調	残存	備考
1	SD01	弥生土器	- - -	壺?	外面に細かな横刷毛目 (櫛描紋)	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にぶい橙 (7.5YR 7/3)	胴部一部残存	
2	SD01	弥生土器	- - -		外面全体に荒い単位の縦と斜めの 刷毛目	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にぶい橙 (5YR 7/4)	胴部一部残存	
3	SD01	弥生土器	- - -		外面に細かな横刷毛目 (櫛描紋)	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にぶい橙 (7.5YR 6/4)	胴部一部残存	
4	SD01	弥生土器	- - -		外面に細かな横刷毛目 (櫛描紋)	やや粗 石粒の混合材を含む 良 橙 (2.5YR 6/6)	胴部一部残存	
5	SD01	弥生土器	- - -		外面に細かな横刷毛目 (櫛描紋) 内面僅かにヘラ痕	やや粗 砂礫を含む 良 にぶい黄橙 (10YR 7/2)	胴部一部残存	
6	SD01	弥生土器	- - -		外面全体に荒い単位の縦と斜めの 刷毛目	やや粗 砂礫を含む 良 橙 (5YR 7/6)	胴部一部残存	
7	SD01	弥生土器	- - -	壺?	外面全体に荒い単位の縦と斜めの 刷毛目	やや粗 石粒の混合材を含む 良 にぶい橙 (5YR 7/4)	肩部一部残存	
8	SK08	磁器	- - -	碗 肥前	二重綱目文	密 良 青白色	胴部一部残存	
9	SP05	白磁	- - (3.0)	皿 輸入陶磁	IX類 13c 後半～14c 前半	密 良 灰白色 (N8)	底部一部残存	
10	SX01	青磁	- - -	輸入陶磁		密 良 明緑灰色 (7.5GY 7/1)	胴部一部残存	
11	SX01	金属器	全長 4.2 - 1.5	煙管雁首	火皿径 1.2 火皿高 0.8		肩部一部欠損	
12	SX01	陶器	- - -	不明	近世	密 良 灰赤色 (2.5YR 6/2)	胴部一部残存	
13	SX01	須恵器	- - -			やや粗 良 灰白色 (N8)	胴部一部残存	
14	遺構外	須恵器	- - -			やや粗 良 灰白色 (N7.5YR 8/2)	胴部一部残存 付帯の一部残存	
15	表採	陶器	- - (4.8)	不明 高台部	近世	密 良 明褐灰色 (7.5GY 7/2)	底部一部残存	

6. まとめ

今回の調査は、27 m²という調査範囲の中で、弥生時代、中世、近世の時期と思われる遺構が確認された。周辺で実施された過去の調査結果を参考にして、弥生時代の方形周溝墓の溝の可能性のあるSD01が確認できた。（図21参照）SD01からの出土遺物は、弥生土器片であるが、いずれも細片であるため、器形・形態等の詳細は不明である。

中世の遺構は、土壙と不明遺構が確認されたが、出土遺物がなく、時期は特定できなかった。

近世の遺構としては、土壙、ピット、不明遺構が確認された。ピットの配列から柱穴列の可能性があるものが3列確認されたが、調査範囲が狭く、全容は明らかにできない。出土遺物は、陶磁器片と煙管等が出土し、ある程度、時期の特定できる遺物が出土した。

今回は、調査範囲が限られた中での調査で、資料の追加ができたことと、過去の調査結果とは異なる主軸方位を持つ方形周溝墓の溝の可能性がある遺構が確認されたことをふまえて、遺跡範囲が広がる可能性を提示出来たことが、成果としてあげられる。今回の結果をふまえ、既往の調査結果を加味して能島遺跡の性格について考えてみたい。

弥生時代においては、第1次調査と第2次調査で計31基の方形周溝墓が検出されており、今回検出された1基を加えて計32基の方形周溝墓が検出されたこととなる。特に今回検出された方形周溝墓は、墓域がさらに北側に広がる可能性を示したものであり、これら方形周溝墓の被葬者集団の居住域の発見もあわせて、今後の調査に期待したい。

中世及び、近世については、少量ながら輸入陶磁が出土していることが、第1次調査の報告書による「津」の役割を想定されていることとの関連をうかがわせる。また、第1次調査で検出された井戸に加えて、第2次調査で墓やピットが検出され、今回もピットが検出されており、恒常的な施設の存在をうかがわせる。建物の検出は今後の課題したい。

なお、参考資料として、「能島遺跡発掘調査報告書」2010との遺構の合成図（図22～図24）を作成したので、今後の調査の参考資料として報告したい。

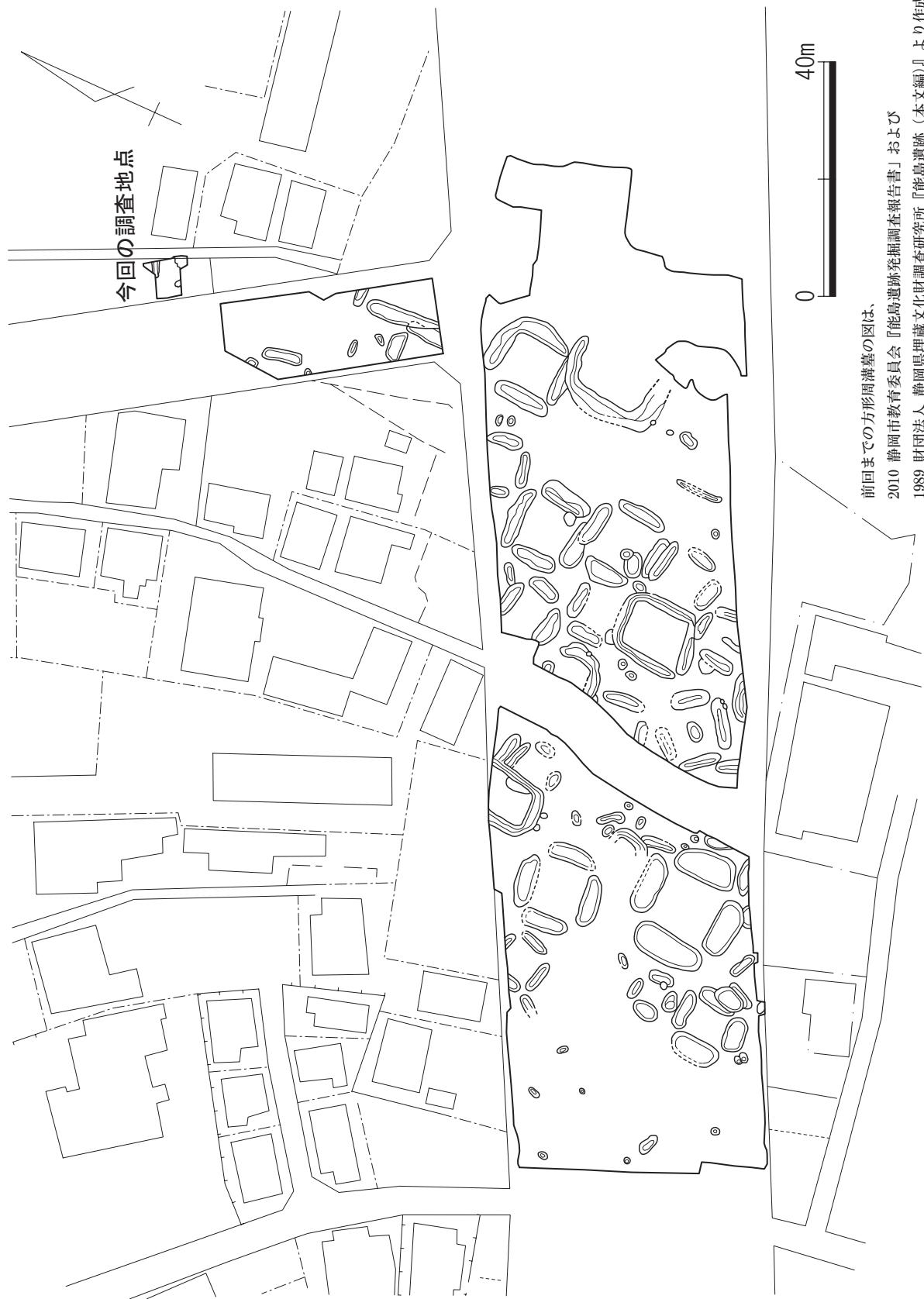


図21 能島遺跡方形周溝墓配置図 (S=1/1,000)

前回までの方形周溝墓の図は、
2010 静岡市教育委員会「能島遺跡発掘調査報告書」および
1989 財団法人 静岡県埋文化財調査研究所「能島遺跡（本文編）」より作成した

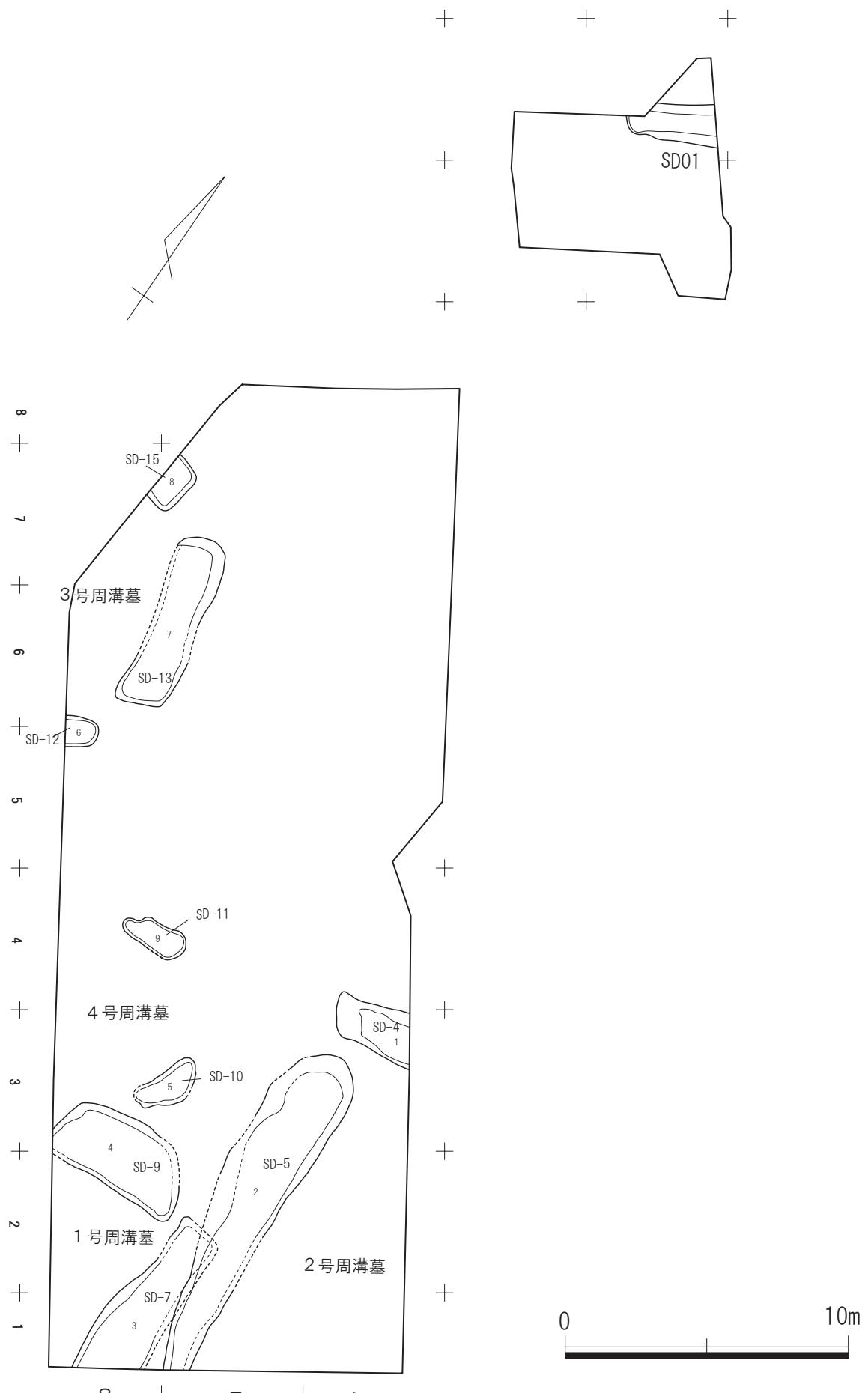


図 22 第2次調査との弥生時代の遺構合成図 (S=1/200)

6.まとめ

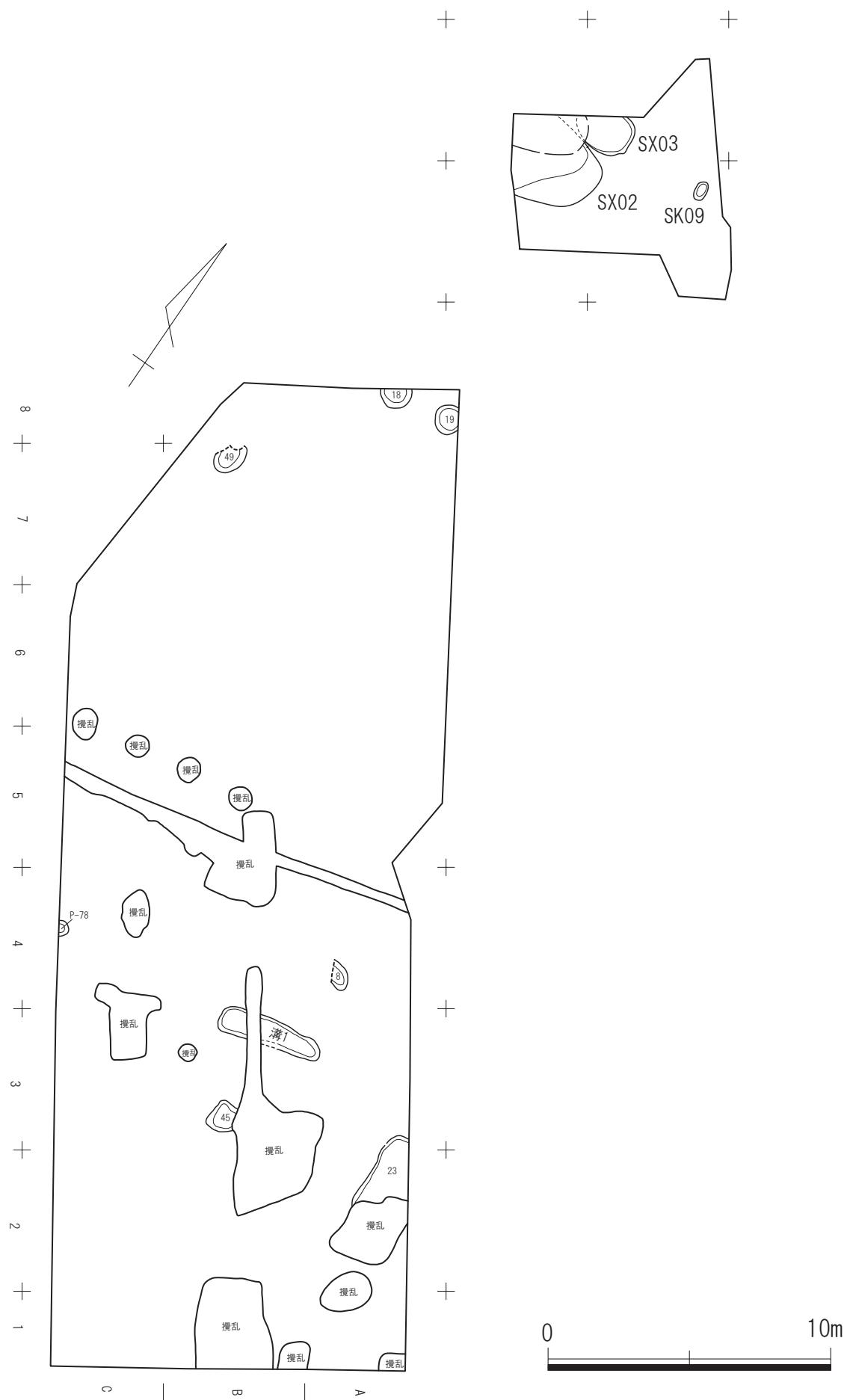


図23 第2次調査との中世の遺構合成図 (S=1/200)

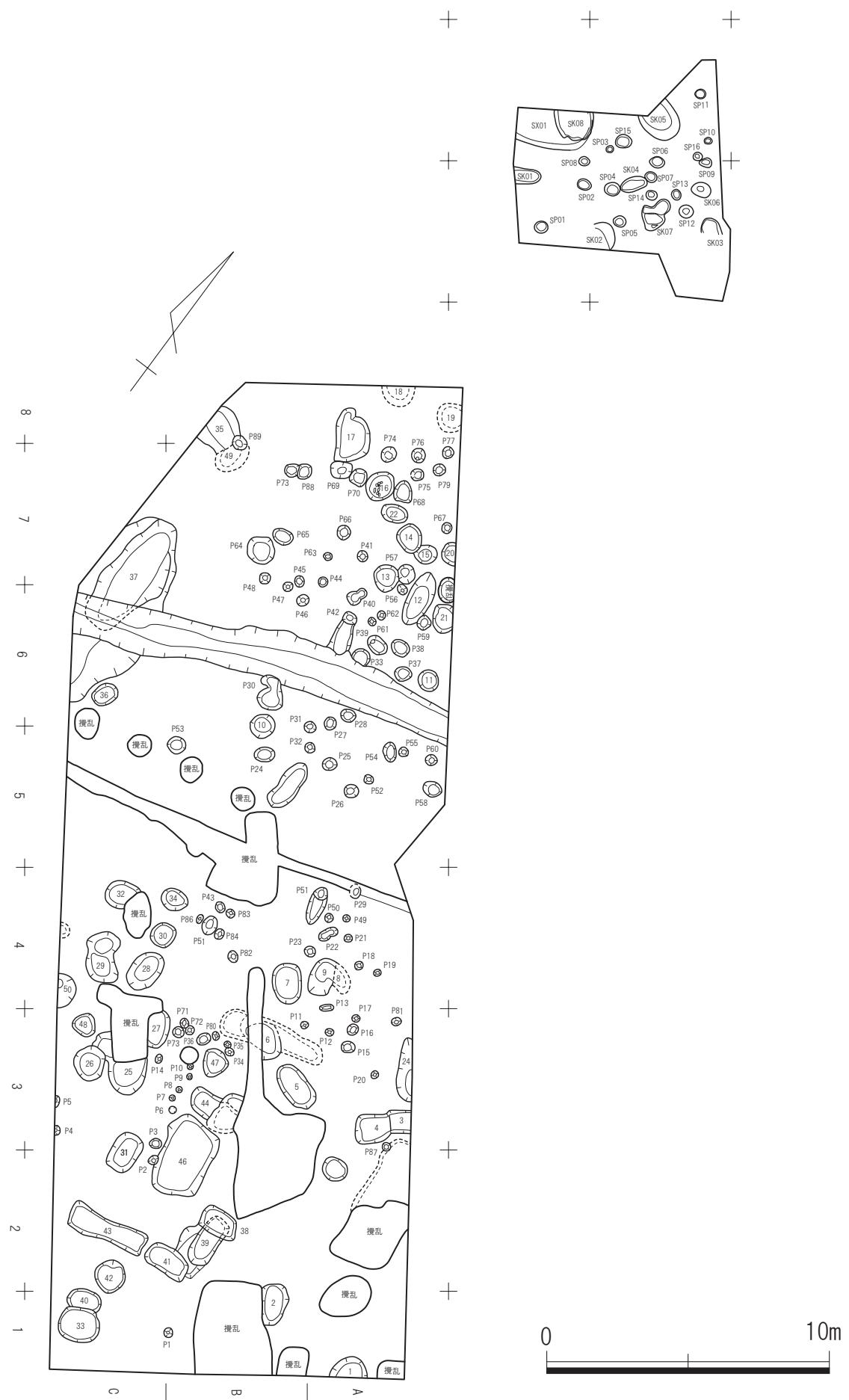


図 24 第2次調査との近世の遺構合成図 (S=1/200)

引用・参考文献

- 沼館愛三 1935年 静岡県郷土研究協会
『静岡県郷土研究 第5輯』
「有度山塊を中心とする古城館跡の研究」
- 横田賢次郎他 1978年 九州歴史資料館
『九州歴史資料館研究論集4』
「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」
- 静岡県教育委員会 1987年
『静岡県の中世城館跡』
- 森田勉他 1982年 日本貿易陶磁研究会
『貿易陶磁研究 NO.2』
「14～16世紀の白磁の分類と編年」
- 古泉弘 1983年10月9日発行 柏書房株式会社
『江戸を掘る 近世都市考古学への招待』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988年3月30日発行
『内荒遺跡（遺物編）昭和62年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988年3月30日発行
『能島遺跡（図版編）昭和60年～62年度静清バイパス（能島地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989年3月31日発行
『能島遺跡（本文編）昭和60年～63年度静清バイパス（能島地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991年3月30日発行
『宮下遺跡（遺物編）平成2年度静清バイパス（川合地区）』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992年3月30日発行
『川合遺跡（遺物編2）平成3年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書
(石製品・金属製品本文編)』
- 原廣志 1999年 静岡県菊川町教育委員会
『静岡県指定史跡 横地城跡－総合調査報告書－』
「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」
- 江戸遺跡研究会 2001年4月25日発行 柏書房株式会社
『図説 江戸考古学研究事典』
- 静岡市教育委員会 2006年3月31日発行
『静岡市遺跡地名表（附 静岡市遺跡地図）』
- 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006年12月9日発行
『江戸時代のやきもの－生産と流通－記念講演会・シンポジウム資料集』
- 片平剛他 2008年3月21日発行 パル文化財研究所
『有東遺跡 店舗建設に伴う第21次発掘調査報告書』
- 静岡市教育委員会 2010年3月31日発行
『能島遺跡発掘調査報告書』

写真図版



1. 調査区全景（南東から）



2. 調査区全景（西から）

図版 2



3. 調査区土層断面（西壁）



4. 調査区土層断面（北壁）



5. 調査区精査（北から）



6. SD01 遺物出土状況（南から）



7. SD01 断面（西から）



8. SD01 完掘（東から）



9. SP05 断面（南から）



10. SP05 完掘（西から）

図版 6



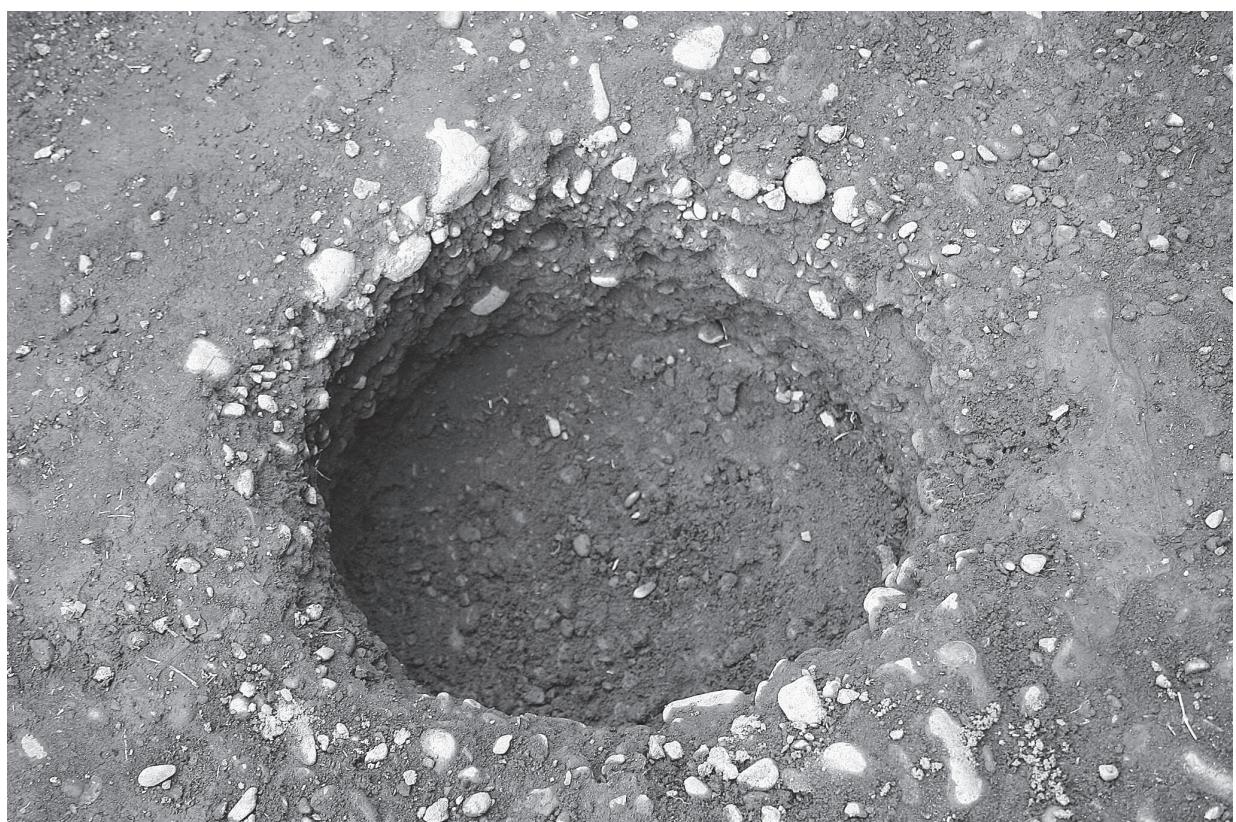
11. SK08 断面（東から）



12. SK08 完掘（東から）

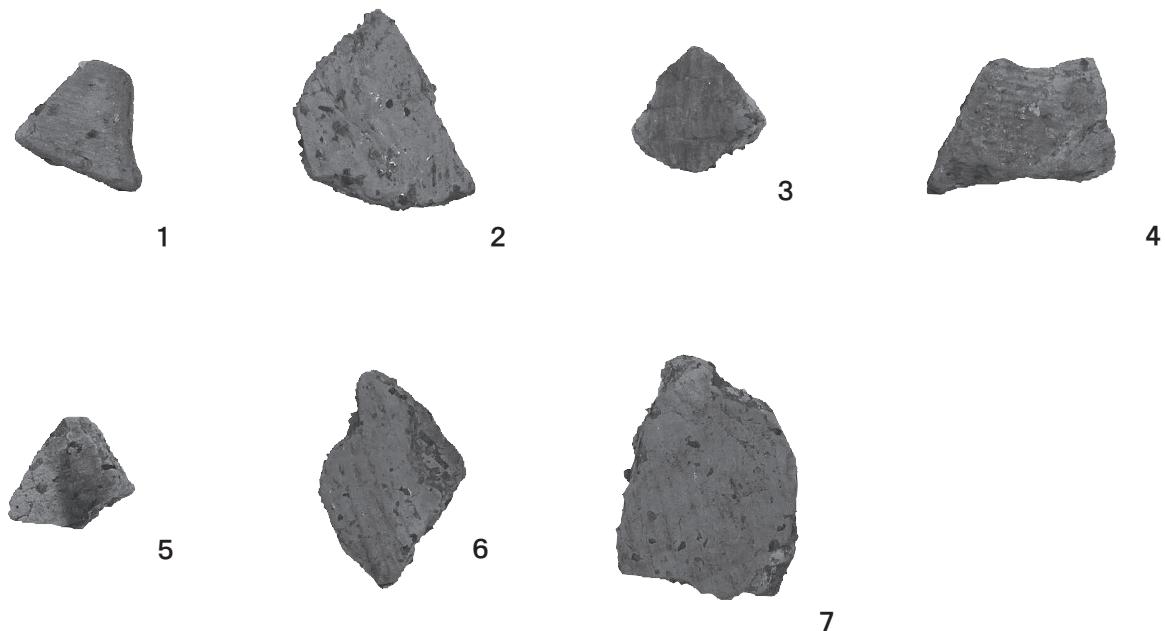


13. SP12 断面（南から）

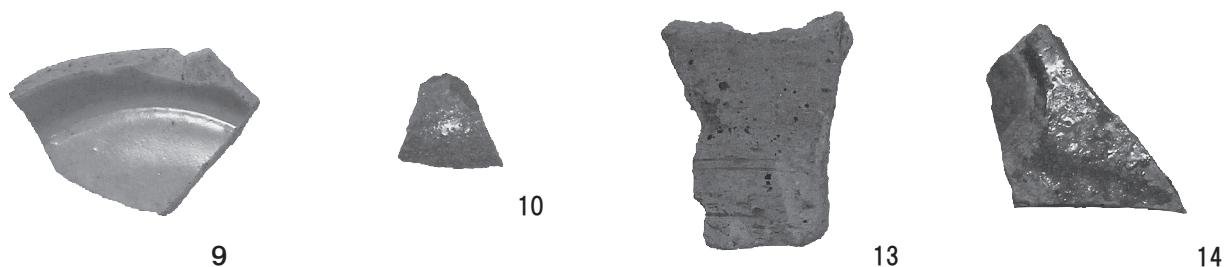


14. SP12 完掘（西から）

図版 8



15. 弥生時代の遺物



16. 中世の遺物



17. 近世の遺物

報告書抄録

ふりがな	のうじまいせき							
書名	能島遺跡							
副書名	第3次発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡市埋蔵文化財調査報告			シリーズ番号				
編著者名	大川敬夫（静岡市教育委員会）、片平剛、佐野貴紀（パル文化財研究所）							
編集機関	静岡市教育委員会							
所在地	〒420-8602 静岡県静岡市葵区追手町5-1 TEL 054-221-1085							
発行年月日	平成25（2013）年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のうじま いせき 能島遺跡	しづおかん しづおかし しみずく 静岡県 静岡市 清水区 おおうちしんでん 大内新田7-1	22201	市 C111	(世界測地系) 35° 01' 35"	138° 27' 31"	2013年 4月9日～ 2013年 5月9日	27m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
能島遺跡	墓	弥生～近世	方形周溝墓 溝状遺構 建物跡 土壤	弥生土器、陶器				

静岡県静岡市清水区

能島遺跡

— 第3次発掘調査報告書 —

開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25（2013）年9月15日 印刷

平成25（2013）年9月30日 発行

編集・発行 静岡市教育委員会

〒420-8602 静岡県静岡市葵区追手町5-1

TEL 055-221-1085

印刷：（有）文書サービス

TEL 054-284-3030

